龍野市

小犬丸
大谷遺跡

山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書1

2004年3月

兵庫県教育委員会

小犬丸

大谷遺跡

遺跡の位置（南西から）

調査区全景（南から）

竪穴住居１・２（西から）

柱穴Ｐ43出土瀬戸灰釉小壺

同出土状況

例　言

1．本書は、兵庫県龍野市揖西町小犬丸字大谷に所在する小犬丸大谷（こいぬまる　おおたに）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．遺跡の発掘調査は、山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴い日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所（当時）の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3．遺跡の本発掘調査は、平成10年度におこなわれ、調査担当として兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　別府洋二・三枝　修があたった。発掘調査に際しては、株式会社吉田組と作業委託契約を交わして実施した。

4．報告書作成にかかる整理作業は日本道路公団関西支社の依頼を受けて、平成12～15年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所がおこなった。

5．掲載した写真については、空中写真は株式会社ウエスコに委託して撮影した。その他の遺構写真等は調査担当者によるものである。遺物写真は株式会社イーストマンに委託して撮影したものを使用した。金属器のX線透過写真は金属器保存処理担当、岡本　一秀によるものである。

6．掲載した図については、地形図については国土地理院発行のもの及び日本道路公団提供のものを使用した。遺構配置図等については株式会社ウエスコに委託して作成した空中写真測量図を用いた。その他の図に関しては調査担当者及び嘱託職員の手によるものである。

7．発掘調査に際しては、日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所、龍野市教育委員会、地元小犬丸の方々にはお世話になりました。また、発掘調査に従事していただいた株式会社吉田組や三和共同建設の皆さんにも記して感謝の念と変えさせていただきます。

8．本書の編集、執筆は増田麻子の補助の元、別府がおこなった。

目　次

本 文 目 次

第１章　調査に至る経緯と調査の経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1

第２章　遺構
　第１節　概要 …… 5
　第２節　竪穴住居 …… 5
　第３節　掘立柱建物と柱穴 …… 6
　第４節　土坑と火葬址 …… 7
　第５節　溝と流路 …… 8
　第６節　小結 …… 10

第３章　遺物
　第１節　概要 …… 11
　第２節　西区出土の土器・土製品 …… 11
　第３節　東区出土の土器 …… 21
　第４節　石器・石製品 …… 21
　第５節　金属製品 …… 22
　第６節　小結 …… 25
第４章　まとめ …… 27

挿 図 目 次

№10地点検出土坑 …… 4
柱穴内土器出土状況写真　P66　P71 …… 10
発掘調査状況写真 …… 30

図 版 目 次

図版１　山陽自動車道新宮インターチェンジ関連遺跡分布図
図版２　周辺の地形と調査範囲
図版３　調査地区
図版４　遺構配置図
図版５　西区遺構配置図(詳細)
図版６　基本土層図
図版７　竪穴住居　SH1
図版８　竪穴住居　SH2
図版９　掘立柱建物　SB１・２・３・４
図版10　掘立柱建物　SB５・６・７・８・９
図版11　土坑　SK１・２・３・４
図版12　火葬址１・２
図版13　溝等土層図　流路３、SD２、落ち込み、SD11
図版14　遺物　土器１　竪穴住居、柱穴出土土器
図版15　遺物　土器２　柱穴、落ち込み、土坑出土土器
図版16　遺物　土器３　溝、流路出土土器
図版17　遺物　土器４　流路２出土土器
図版18　遺物　土器５　流路２出土土器
図版19　遺物　土器６　旧河道、西区包含層出土土器
図版20　遺物　土器７　西区包含層出土土器
図版21　遺物　土器８　西区包含層出土土器
図版22　遺物　土器９　西区・東区包含層出土土器
図版23　遺物　石器１
図版24　遺物　石器２
図版25　遺物　石器３
図版26　遺物　金属器１　銅製品、遺構出土鉄器
図版27　遺物　金属器２　西区包含層出土鉄器
図版28　遺物　金属器３　西区・東区包含層出土鉄器

写 真 目 次

巻首カラー図版１	遺跡の位置（南西から）	調査区全景（南から）
巻首カラー図版２	竪穴住居１・２（西から）	柱穴P43出土瀬戸灰釉小壺　同出土状況
写真図版１	遠景	遠景（南から）　遠景（北西から）
写真図版２	遠景	遠景（西から）　遠景（調査区）
写真図版３	全景・遠景	東区全景（左が北）
		遠景（南から）　近景（南から）
		近景（西から）　谷の出口をのぞむ（北から）
写真図版４	全景	西区全景（上が北）
写真図版５	全景	全景（東から）　西区（南から）　東区（南から）
写真図版６	調査区	西区（北から）　西区北半　西区南半　西区（北から）
写真図版７	竪穴住居	SH1（西から）　SH1 検出状況(西から）　SH1 中央土坑（東から）
		SH1（東から）　SH1 と周辺(西から)
写真図版８	竪穴住居	SH2（南から）　SH2（北から）　SH1とSH2（西から）
		SH2台石出土状況　弥生土器出土状況（SD11）
写真図版９	掘立柱建物	SB1（北から）　SB2（東から）　SB3・4（北から）
		SB5・6（西から）　SB7（北から）　SB8・9（西から）
写真図版10	土坑・火葬址	SK3（南西から）　SK2（北東から）　SK7（東から）
		SK9（北から）　火葬址１（南から）　火葬址2（西から）
写真図版11	溝・流路	SD4（北から）　SD5（南から）　SD6・7・8、流路3（東から）
		SD9・10・11（南から）　SD11と旧河道（南から）
		SD11土器出土状況
写真図版12	遺物	土器
写真図版13	遺物	土器
写真図版14	遺物	土器
写真図版15	遺物	土器
写真図版16	遺物	土器
写真図版17	遺物	土器
写真図版18	遺物	土器
写真図版19	遺物	土器
写真図版20	遺物	土器
写真図版21	遺物	土器
写真図版22	遺物	土器
写真図版23	遺物	石器
写真図版24	遺物	石器
写真図版25	遺物	金属器
写真図版26	遺物	金属器
写真図版27	遺物	金属器
写真図版28	遺物	金属器

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

山陽自動車道新宮インターチェンジ事業は、山陽自動車道龍野西ジャンクションと主要地方道相生山崎線新宮インターチェンジとを結ぶ南北の連絡道として、日本道路公団大阪建設局姫路工事事務所によって計画された。この事業は兵庫県が推進する西播磨テクノポリス計画の拠点都市である播磨科学公園都市へのアクセス道路として計画され、龍野市揖西町土師より龍野市西部を北上し、相生市の北東部を通過して、揖保郡新宮町の南西部に入り、揖保郡新宮町角亀に至る、延長12.8 kmの自動車専用道路の建設事業である。

事業計画地内や周辺には、大陣原古窯跡群や小犬丸遺跡の存在が知られており、また古代山陽道を横切っていることから、事業用地内にその他の埋蔵文化財が存在することが予想された。このため平成６年度には兵庫県教育委員会により事業用地内の分布調査を実施、その後数次にわたって工事用道路等の分布調査を行い、平成８年度から逐次確認調査を実施した。

第２節　調査の経過

分布調査

平成６年度の分布調査によって、水田上から須恵器片などが採集されたことによって遺跡の存在が推定され、№12地点として登録された。この地点の南西の丘陵上では尾根筋が南北に走っており、眺望のよい地点であることから、古墳の存在が推定され、№10地点、№11地点として登録された。更に平成７年度には、この谷に進入する工事用道路用地の分布調査が実施され、須恵器・土師器の散布が見られたことから、龍野－５工事用道路として遺跡の存在が推定された。

確認調査

平成９年度には№12地点の確認調査として合計12ヶ所に２m × ２mのグリッドを設定して、重機及び人力によって掘削がおこなわれた。その結果、東からの谷出口に広がる扇状地上で柱穴や溝が検出され、主として奈良時代から平安時代の土器が出土したことから、小犬丸大谷遺跡として本発掘調査を実施することとなった。確認調査をおこなったうち北側部分では中谷川の旧河道と考えられる砂礫の堆積が厚く、遺物も出土していない。

平成10年度には小犬丸大谷遺跡の東背後の丘陵上にある№10地点、№11地点の確認調査を実施した。各地点で炭を含んだ焼土坑を各１基検出したが、他の遺構や遺物は検出されず、竈域や居住域といった継続的な人為的利用はなされていないことが判明した。

また、谷出口部分の工事用道路箇所についても確認調査を実施したが、摩滅した土器片は出土するものの遺構等は検出されておらず、谷の東側の山裾には集落は広がっていないことが判明した。谷を出た東側の小犬丸中谷廃寺の調査では、古代寺院の他にも16世紀までの中世の集落が存在しており、中谷川を挟んだ西側の宿垣内の字名の一端が窺われる。

本発掘調査

確認調査の結果、遺跡が存在することが判明したため、慣例により所在地の小字名をもって小犬丸大谷遺跡として本発掘調査をおこなうこととした。調査地点は、谷の奥へと続く現道を挟んで東側の小谷奥を東区、中谷川の氾濫原に面した低い側を西区とし、調査の進展につれて北側に一部拡張した。現道の下は、溜池や植栽、林業関係者の通行があるため、調査対象から除外した。

平成10年5月22日に発掘調査に着手し、5月27日の調査区設定後、重機によって表土等を除去、包含層上面まで掘削した。包含層から遺構検出面までは人力により掘削し、遺構の調査をおこなった。掘削した残土は道路建設用地内にダンプトラックやベルトコンベア等を用いて搬出した。

検出された遺構は写真・実測図によって記録を留め、全体の遺構配置や地形は空中写真測量によって記録した。8月28日には工事検査を受け、9月1日日本道路公団大阪建設局長と現場引継ぎをおこなって、現地調査を完了した。

発掘調査の担当者は以下のとおりである。

調査第1班	主査	別府洋二
	研修員	三枝　修
	室内作業員	森崎由起子
	同	別府琢郎

出土品整理作業

発掘調査によって出土した土器等の遺物は、発掘調査事務所にて洗浄をおこない、一部についてはネーミングをおこなった。その後の整理作業については、兵庫県埋蔵文化財調査事務所にて実施した。平成12年度からは、出土した土器の接合・復原作業を実施した。

整理作業の担当は以下のとおりである。

調査第1班	主査	別府洋二
整理普及班	主任	菱田淳子
同	技術職員	岡本一秀
	非常勤嘱託職員	増田麻子・吉田優子・喜多山好子・眞子ふさ恵・早川亜紀子
		中田明美・石野照代・蔵幾子・烏村順子・大仁克子・前田千栄子
		横山キクエ・小寺恵美子・岡井とし子・前田恭子・蓬莱洋子

平成15年度には実測・トレース・写真撮影・レイアウト作業及び、金属器の保存処理をおこない、原稿執筆とあわせて報告書を刊行した。

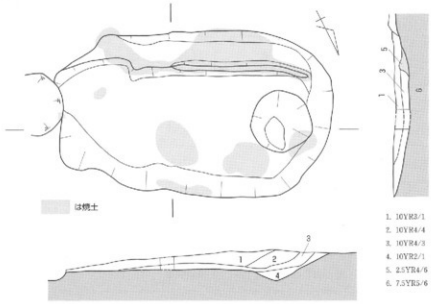
整理作業の担当は以下のとおりである。

調査第1班	主査	別府洋二
整理普及班	主査	菱田淳子
同保存処理担当	主任	岡本一秀
	非常勤嘱託職員	増田麻子
		栗山美奈・三好綾子・藤井光代・三島重美・豊田貞代・森田美徳

山陽自動車道新宮インターチェンジ関連埋蔵文化財調査一覧 （龍野市域分）

調査の種別	調査時期	調査地点	調査番号	備　　考
分布調査	H6年5月	龍野市域	940147	確認調査必要箇所　12ヶ所 No.1～12地点
分布調査	H7年12月	工事用道路、相生市域	950415	確認調査必要箇所　10ヶ所
分布調査	H8年4月	龍野市域再調査	960014	確認調査必要箇所　5ヶ所
確認調査	H8年5月	No.6地点	960043	長尾三の谷遺跡確認
確認調査	H8年5月	No.13地点	960044	
確認調査	H8年5月	No.1地点	960268	
確認調査	H8年5月	龍野―5工事用道路 No.9地点	960269	
確認調査	H8年10月～12月	No.4－B地点 龍野2工事用道路	960392	
確認調査	H9年2月	No.4－A地点	960436	
確認調査	H9年2月	No.4－B地点	960437	
確認調査	H9年2月	No.9地点	960438	小犬丸中谷廃寺確認
分布調査	H9年2月	工事用道路	960455	確認調査必要箇所　1ヶ所 No.6地点
確認調査	H9年5月	No.4－A地点	970152	竹原播磨塚遺跡確認
確認調査	H9年5月	No.6地点	970153	長尾三の谷遺跡確認
確認調査	H9年5月	No.9地点	970154	小犬丸中谷廃寺1・2区 2次確認
本発掘調査	H9年8月 ～H10年1月	竹原播磨塚遺跡	970244	平安時代掘立柱建物・積石塚
本発掘調査	H9年8月 ～H10年1月	長尾三の谷遺跡	960245	弥生～奈良時代の集落
本発掘調査	H9年8月 ～H10年1月	小犬丸中谷廃寺	970243	古代寺院築地跡 中世集落
確認調査	H9年10月	No.12地点	960369	小犬丸大谷遺跡確認
確認調査	H10年2月	No.4－B地点	970438	
確認調査	H10年4月	No.9地点	980033	小犬丸中谷廃寺3・4区確認
確認調査	H10年5月	No.10地点	980051	
確認調査	H10年5月	No.11地点	980052	
確認調査	H10年5月	No.1－A地点	980068	

調査の種別	調査時期	調査地点	調査番号	備　　考
本発掘調査	H10年5月～9月	小犬丸大谷遺跡	980070	本書掲載遺跡
確認調査	H10年9月	No.9－C地点 工事用道路	980125	小犬丸中谷遺跡確認 小犬丸中谷古墳確認
本発掘調査	H10年9月～12月	小犬丸中谷廃寺	980127	古代寺院瓦葺建物 中世集落
本発掘調査	H10年10月～11月	小犬丸中谷遺跡 小犬丸中谷古墳	960160	平安後期～鎌倉の掘立柱建物 横穴式石室
確認調査	H10年11月～12月	No.4－C地点	980186	
確認調査	H10年11月～12月	No.16地点	980188	
確認調査	H10年11月～12月	No.17地点	980189	
確認調査	H11年3月	No.1－B地点	980337	大陣原窯跡確認
確認調査	H11年3月	No.6地点	980338	
本発掘調査	H11年8月～12月	大陣原窯跡	990212	製鉄関連炭窯
確認調査	H11年12月	不時発見	990266	竹原中山遺跡確認
本発掘調査	H12年1月～3月	竹原中山遺跡	990299	弥生中期後半の高地性集落
確認調査	H12年5月	No.6地点南	200209	平田山遺跡隣接地
確認調査	H12年5月	No.6・7・8地点	200292	保安林



No.10 地点検出土坑

第2章　遺　構

第1節　概　要

本発掘調査範囲は、狭小な谷の中にあり、南側の谷の出口からは約500m奥まった地点である。東側からの更に小さな谷からの出口周辺に形成された扇状地上の立地を示している。このため地形は東から西へと傾斜しており、また、南へとわずかに下っている。調査区の中央を南北に現道が走っており、谷の奥に続く。この道は谷奥の溜池や畑、植林地への道路であるため、調査範囲から除外した。この道を挟んで東区と西区に分けて調査を行った。

調査地は現状では畑地や街路樹用の樹木の栽培地となっており、東区には建物が建てられていたらしい。このため東区では大きな攪乱坑があき、面も削平されていた。東区では土坑・柱穴等が検出されたが、柱穴から建物を復元することはできなかった。

西区では東側からの谷地形が中央を東西に走って流路1・3やSD6～8となり、調査区を南半・北半に分ける。西区の北西部は旧河道（流路2）への落ち込みとなる。西区からは竪穴住居（SH）・掘立柱建物（SB）・柱穴（P）・土坑（SK）・火葬址・溝（SD）・流路などが検出された。これらの遺構はほぼ同一面で検出されたが、火葬址は数10cm上で検出している。

第2節　竪穴住居

弥生時代中期末の竪穴住居址を2棟検出した。同時代のその他の遺構は少なく、竪穴住居以外には流路3とSD9に挟まれた地区の柱穴（P74・76・83）などから弥生土器が出土しているに過ぎない。

SH 1

南半部の流路1の南側で検出された。検出された段階ですでに周壁溝が一部見えており、削平されている。一部に炭化材や焼土が確認されており、焼失住居と思われる。直径約5.8mの円形住居で4本柱を持つ。幅約20cm、深さ約10cmの周壁溝を巡らせ、一部に周壁溝内に杭状の小穴が見られる。中央には深さ5cm程度の長円形の土坑と、深さ18cm程度の歪な円形の土坑が並び、円形土坑を挟むように深さ14cmと24cmの小柱穴が2ヶ所穿たれている。所謂一〇土坑の形態であるが、壁面は焼けてはいない。削平や後世の切り合いのためか遺物はほとんど出土せず、土器（1・2）と磨石（S5）が図化できたにすぎなく、時期の異なる遺物も含まれていた。

SH 2

平安時代までの土器が出土したSD6～8によって切られており、過半を失っている。直径6.5m以上の円形住居とおもわれ、一部途切れるものの周壁溝を巡らせる。柱数は不明であり、中央土坑も失われている。住居址の深さは25cm程度残っており、そのためか比較的多くの遺物の出土が見られた。台石（S11）は一部周壁溝にかかる形で出土しており、出土時には使用面も傾斜していた。その他の出土遺物には弥生土器（3～20）、石鏃（S1）がある。石製の円盤(S10)は最上層から出土している。

第3節　掘立柱建物と柱穴

発掘調査によって検出された柱穴は多いが、調査時点で現地において掘立柱建物を復元できたものは少ない。以下に記述する掘立柱建物8棟は図上でできるだけ復元したものである。この他にも西区南西端の段状の落ち込み下やSD2周辺、SH1周辺などでは柱穴が集中しており、掘立柱建物が存在していた可能性が高いが、調査区外に広がっているなどで建物を復元できなかった。また、遺物が出土した柱穴は80ヶ所以上に及ぶが、出土した土器・鉄器のうち図化できたものは33点に過ぎず、建物を構成する柱穴からの出土も少なく、復元建物の時期をすべて決定できたわけではない。

SB 1

西区南東部で検出された。2間×2間しか復元できないが、南側にはSD1を挟んで数間延びる可能性がある。東側は現道の下となる。SD1に切られており、北側には焼土が存在する。所属時期不明。

SB 2

SB2～6はSD2、SD4、流路に囲まれた柱穴集中地点で復元しており、共に重複し合う。3間×4間の側柱建物の東西棟で、東側に軒または縁が1間取り付く。西側にはSD5からの落ち込みやSK7で限られ、柱の一つは礎石を用いる。南辺を構成するP20から備前擂鉢（46）が出土。また、P23からは土師器皿（28）、鍋（38・39）が出土しており、15世紀以降の年代を与えることができよう。

SB 3

復元できた建物の中で最も大きな規模をもつ。4間×5間の南北棟で、東西柱間が1.7～2.0m、南北柱間が2.0～2.2mで、北端のみ3.0mとなる。南西隅は礎石を用いている。P78からは弥生土器（21）が出土したのみであるが、北端の1間分を除いた建物の中心に瀬戸灰釉小壺が出土したP43が存在する。

SB 4

SB4やSB3と重複している。3間×3間で、南北柱間2.1～2.5m、東西柱間1.7～2.0mであるが、西端のみ2.5mと南北柱間と同じく長くなる。

SB 5

3間×3間の東西棟で、東側に軒または縁が1間取り付く。柱間は、南北1.6m、東西2.1mで、西側では2.5mとなる。西端の内側には1間×2間の柱が並び、東柱の可能性がある。SD3と方位を共通する。西北隅のP55から鉄製楔（M6）が出土している。

SB 6

SB5の北側に隣接して建つが、若干方位を異にする。3間×3間の側柱建物東西棟で、柱間は東西2.2m、南北1.0～1.2mとなる。

SB 7

SB7～9は北半で検出された。SD9はこの建物の横から始まる。他の建物とは大きく方位を違えてSD7と共通した方位をもつが、等高線とはほぼ平行になる。2間×4間の南北に長い建物で、柱間は南北2.0～2.5m、東西1.8mである。

SB 8

2間×2間の南北棟建物で、柱間は南北2.0～2.3m、東西1.5～2.1mである。内側1／4間に束柱をもつ。南側のSB1～5と同じ方位を示しており、SD9に跨って建つ。

SB 9

3間×3間の総柱建物東西棟を復元した。柱間は梁行、桁行とも2.0 mであるが、東西の中央の間は1.8 mと広くなる。SD 9とSD11に囲まれた位置で検出され、方位も共通する。

P 43

P43は西区南半のSD 4とSD 5に挟まれた5区で検出されており、SD 5の東に近接している。掘立柱建物のSB 3内の身舎のほぼ中央にあり、また、SB 2やSB 4の北辺に近接する。直径約37 cm、深さ約34 cmの柱穴で、三角錬状の山石を除去した下から瀬戸灰釉小壷（47）が横倒しになった状態で出土した。瀬戸灰釉小壷は柱穴の底に据えられたものではないが、上に石を入れて埋めた状況から地鎮的な埋納の可能性が高い。SB 3に伴う地鎮であろうか。

第4節　土坑と火葬址

東区・西区からは土坑や落ち込みが検出されたが、浅く不整形な平面形態をもち、埋土も単一で遺物を伴わないものは除外した。

SK 1

東区で検出されたSK 1は細かい炭が詰まった土坑で、縦5.0 m、横1.85 mの歪な長円形の平面形態をもつ。深さは約0.23 m。平坦に近い緩やかな斜面に立地している。西区のSK 2や大谷遺跡の東丘陵上での同事業の確認調査でも同様の土坑が検出されている。また、同様の遺構は古窯跡群に関連した神出遺跡や淡路島の大森谷遺跡など各地でも見られ、近年では鉄生産などに伴う炭焼窯としての性格も考えられている。大谷遺跡では西区南半などで焼土が検出されており、鉄器出土の多さとも関連して、鍛冶関連施設の存在が考えられる。遺物は出土していない。

SK 2

西区の南側で検出された土坑で、縦3.5 m、横1.9 mの歪な長円形を呈している。SK 1と同じく埋土中に炭層を含み、深さも10 cmと浅い。炭層は埋土の中層に分布している。遺物は出土していない。

SK 3

西区の南端で検出された。縦3.4 m、横1.8 mの長方形の平面形態をもち、南西の隅部分が突出する。深さ20 cm程度に緩やかに落ち込む。遺物は出土していない。

SK 4

掘立柱建物SB 1の西側で検出された。楕円形の平面形態をもち、深さは最深部で50 cmと他の土坑に比べて深い。遺物は出土していない。

SK 7

SD 5の南側に続くように不整形の浅い土坑が広がる。一部には肩に塊石を配しているが、性格は不明である。釘・楔など（M 7～11）が出土した。

SK 9

掘立柱建物SB 2～4とSB 5・6に挟まれた位置で検出された。当初浅い土坑の底が更にもう一段長方形に掘られているため、木棺墓の可能性を考えて調査をおこなったが、底が平坦ではなく、埋土も上面の包含層と同一であったことから、土坑或いは単なる落ち込みと判断した。上層から備前擂鉢（56）が出土している。

火葬址1

火葬址1・2は西区南半の東寄りで重機掘削時に検出された。このため他の遺構よりは上面のものと考えられるが、この周辺では下面まで下げても他の遺構は検出されなかった。2基だけでは墓域とするには躊躇するが、SD3を踏襲する近世以降の溝を挟んだ北隅の地区には掘立柱建物が建つのと対照的である。

上部が削平されており、長径約71㎝、短径約40㎝の楕円形を呈しており、深さは10㎝弱しか残存していない。埋土中には灰や骨片が混じっており、脊椎骨や頭蓋骨と思われる5㎝大の骨片が残存していた。共伴する遺物はない。

火葬址2

火葬址1の北東に近接して検出された。長径約147㎝、短径約58㎝の楕円形を呈しており、深さはやはり5㎝ほどしか残存していない。埋土中には灰が混じっており、南側の壁面の一部が焼けていた。ここからは骨片や遺物は出土していない。

第5節　溝と流路

西区は調査区の西端を流れる中谷川の旧河道（流路2）とそれに直交して東の谷から流れる流路1・3によって大きく南北に分かれる。SD6～8も流路1・3と並行しており、同様の性格かもしれない。旧河道（流路2）は礫によって埋没しており、西端の一部のシルト質の堆積を除いて遺物もほとんど出土していない。

SD 1

SD1は西区南東端でSB1と切りあって検出された。遺物も出土しておらず、東側の山裾を走る自然の流れ込みかも知れない。

SD 2

南端を南北に走る直線溝で、延長した南側には落ち込みが、北側にはSD5が続く。水田造成の段とは重ならないが、平行に走る。この溝の西側の地区は火葬址が検出されただけの建物等のない空白地となる。幅は50㎝、最深部の深さは約38㎝で、南に向かって低くなる。17世紀初頭の唐津（57）が出土している。

SD 3

火葬址と掘立柱建物SB5・6に挟まれて東西に走る溝である。東側は現状でも水の流れる近代以降の溝と重複する。幅は30～50㎝、深さは約13㎝で西に向かって低くなる。この溝の南北で遺跡の様相は異なり、南側は小屋掛け程度の小規模な建物と焼土や炭の含まれる土坑など工房などの作業空間や、一部は火葬址のある墓域となる。これに対して北隅は掘立柱建物の集中する地区となる。

SD 4

西区東半を南北に走る溝で、北側は流路1によって、南側はSD3を踏襲する近代以降の溝によって限られる。幅は80～100㎝、深さは約25㎝で、北側は広くなる。この溝の西側には掘立柱建物が集中する。出土した遺物の中で図化できたのは58の甕のみである。

SD 5

SD4と並行して南北に走る溝で、幅は120～140㎝、深さは約20㎝で、南側は不定形なSK7など

の土坑状の落ち込みとなって続いている。北側に向かって低くなる。土師器羽釜（59）や釘（M12）が出土している。

SD6～8

流路1や流路3の北側でほぼ平行に検出された。洪水による砂礫が主体の流路に比べて埋土にシルト分が多いことから溝とした。SD6・8は西側では複雑に錯綜しているため、その西半部分をSD7とした。ともに出土した遺物は奈良時代から平安時代にかけてのものである。この溝の上流側には同時期の遺構は検出されず、また調査区外の小谷も斜面に岩盤の露出した転石の多い地形で遺構等が存在する可能性は極めて低い。また、調査区内で同時期の遺物が出土するのは南端部の落ち込みや旧河道などであり、この時期の集落の実態は全く不明である。谷の出口にある小犬丸中谷廃寺と同時期のものであり、その関係では注意が必要である。

SD9

流路3の北側で検出され、東から西へと低くなる溝である。幅は35～100cm、深さは10cmと浅い。SD8の延長上にあるが、途切れており、別の性格の遺構であろう。

SD10

SD9に切られるように南北方向に走る。北側の延長上にも一旦途切れて溝状のものが続き、SD11にぶつかり、途中ではT字に分岐する。深さは10cm以下で、SD9とともに畑の畝溝かもしれない。遺物は出土していない。

SD11

SD11は旧河道（流路2）の東肩を平行して走っている深さ約50cmの溝である。更に北側に調査区を拡張して溝の続きを検出したが、浅く細くなり、遺物の出土も少なくなった。溝の南端は折れ曲がって旧河道（流路2）に流れ込む。埋土の下流側の一部には川原石が積み重なっており、石垣状の護岸を想定したが、調査の結果、意図的に石を投げ込んでいたものと判断した。それが埋め戻しなのか、暗渠状にしたものかは不明である。上流側では土師器鍋等の遺物（87～118、M1・M18～M23）が比較的集中して出土している。

流路1

西区の中央を西流して旧河道へと向かう。流末は浅く広がり湿地状となる。東側の谷からの自然流路で、扇状地を形成した後も洪水のたびに地面を切り込み、多量の土砂を供給したものであろう。当初、現状でも水が流れていたため、調査対象から除外していたが、遺構面が続くことや遺物が含まれていることから、周囲の遺物包含層上面まで重機で掘削した。上面の遺物は包含層出土の遺物として取り扱っているが、一部北側では下面まで切り込んでいた。遺物（76～81、M15～M17）が出土したが、備前擂鉢は流路内の北溝とした新しく切れ込んだ流れから出土した。

流路2

調査区の北東で検出された旧河道で、中谷川の本流であろう。以下では旧河道として取り扱う。多量の砂礫によって埋没しており、西岸や川底は検出できなかった。一部には細砂やシルトが堆積しており、遺物は主としてそこから出土している。

流路3

同じく西区の中央を西流して流末は蛇行して旧河道へと注ぐ。流路1に一部切られている。土器（82～86）が出土した。埋土は細砂質であるが、角礫を多く含んでいる。

第6節　小　結

南北を山の張り出しに、西側を中谷川に限られた狭い地区であったが、大谷遺跡で検出された遺構の数は多い。出土した土器から遺跡が営まれた時代も弥生時代から近世までの幅広い年代に跨っているが、所属時期の決定できる遺構は非常に少ない。

弥生時代には円形の竪穴住居が2棟検出された。谷地水田や別の生業を基盤とせざるを得ない立地であり、その意味においては高地性集落と同様の性格を考慮すべきであろう。同時期のその他の遺構については不明であるが、ひとつの単位集団程度の小規模な集落である。

奈良時代から平安時代に属する遺構は溝や流路のみで集落の様相は全く不明である。いくつかの掘立柱建物が建っていた可能性はあるが、抽出することができなかった。

12世紀末から13世紀前半にかけてひとつの集落（屋敷地）が営まれるようになる。SD3、SD4と流路1・3に囲まれた方形の区画に掘立柱建物が建つ。掘立柱建物では最も大きいSB3が方形区画の奥まった高い位置を占め、重複して建物が建てられる。その前面の少し低い位置にはSB5・6が建つ。出土遺物も周辺から多く出土しており、集落（屋敷）の中心であったことを示している。流路を挟んだ北側にも建物は建てられるが、建物規模や柱穴規模も小さくまとまりがない。北端のSD11は16世紀までには消費した土器などのごみが捨てられている。この方形区画の屋敷地の南外側の斜面上方には焼土を伴った小屋掛けがあり、工房的な性格を与えることができよう。更に、外側南の川寄りには火葬址が存在し、他の遺構がほとんど見られない空白地となる。墓域としての性格が与えられるが、当初からのものではないようだ。これらの集落（屋敷）は14世紀を最盛期として断続的に17世紀前半頃まで継続するようである。

P71

柱穴内土器出土状況

P66

第3章　遺　物

第1節　概　要

大谷遺跡から出土した遺物には、土器（弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器）、土製品、石製品、金属製品があり、弥生時代から近世にかけて断続的ではあるが非常に時間幅の広い様相を示している。

以下に西区出土の土器や土製品（土錘）を、竪穴住居・柱穴・土坑・溝・流路・河道・包含層の順に、その後、東区出土の土器について記述し、石器・石製品、金属製品についてはその後一括して記述している。包含層出土の遺物には重機掘削時のものも含まれるが、表土等上層のものは除外している。

第2節　西区出土の土器・土製品

竪穴住居出土の土器

1・2は、SH1から出土した。SH1は炭化材が散見される火災住居である。削平されたためか、火災の際に持ち出されたのか出土した遺物は非常に少なく、図化できたのは土器2点と石器1点（S5）である。

1は土師器甕口縁部で、全体の半分以下しか残存していないが、口径約13.8㎝を復原できる。屈曲して開く口縁をもち、体部外面は縦方向のハケによって調整している。口縁部外面から端部にかけてはヨコナデによって仕上げ、内面は横方向の粗いハケによって調整している。体部内面は横方向のヘラケズリかイタナデが見られ、屈曲部にはヨコナデを施す。屈曲部の器壁は厚い。旧河道出土の119では内面がナデ調整となる。2とともに出土したが、奈良時代のものであろう。

2は弥生土器甕底部で、1/8の残存率で、底径6.5㎝を復原する。器壁は非常に薄いが調整痕は不明である。

3～20はSH2出土の弥生土器である。SH2は流路3、SD6～8によって切られており、過半を失っているが、出土した土器は比較的多い。

3は広口壺の口縁部で、残存率1/6で口径12.8㎝を復原できる。大きく外反する口縁部端の上下を拡張して端面をつくり、3条の凹線を施す。頸部にも凹線が施されているようだ。

4も同様の形態であるが、端面には櫛描波状紋を施す。破片が小さく1/12の残存率であるが、口径約21㎝を復原できる。

5は住居址内の柱穴から出土している。大きく外反する口縁部を持つ広口壺口縁部で、摩滅が著しいがヨコナデで仕上げている。

6は直口壺口縁部で、1/4の残存率で口径約11.8㎝を測る。やや外反する口縁端部の内傾を拡張して端面をつくる。頸部には幅の広い2条の凹線を施す。内外面ともヨコナデによって調整しているが、頸部内面には指頭圧痕が見られる。

7も直口壺口縁部で、1/4の残存率で口径約15.1㎝を測る。外反した後、屈曲して直立する口縁端部は内外に肥厚させている。頸部には幅の広い2条の凹線を施す。内外面ともヨコナデによって調整している。

8は壺の肩部と思われる小片で、上半部は縦方向のハケ調整、下半部は横方向のヘラミガキによって調整されており、二枚貝腹縁部と思われる施紋具による列点紋が斜めに施される。内面は上方向のヘラケズリで調整される。

9～13は甕口縁部で、残存率も1/8から1/12と悪いが、丸みをもった肩部から屈曲して外反する。復元口径は9の13.4㎝から12の27.0㎝と大小がある。大きく屈曲させた口縁端部は上下に拡張させて端面を作る。11のように凹線上に窪ませるものもある。体部外面は縦方向のハケメ、内面は10のような横方向のハケメや、縦方向の板ナデ状の調整を施す。12のように指頭圧痕を残すものもある。

14～16は高杯口縁部で、椀形を呈する。体部からわずかに屈曲して立ち上がる口縁部には端面を持ち、端部直下の外面に1条の凹線紋を施すものもある。体部外面は横方向のヘラケズリ、内面には横方向のハケメが観察されるが、外面や端部全面はヨコナデを施して終わる。

17～20は高杯脚部と考える。緩やかに湾曲させた脚端部を肥厚させて面を作る。内面は横方向のヘラケズリ、外面は縦方向のヘラミガキで仕上げる。20の外面はナデによって仕上げているが、クシ描きの紋様が描かれる。

柱穴出土の土器

21～49は西区で検出された柱穴から出土している。

21・22はP76から出土した弥生土器高坏である。21は杯部で口縁部は内側に肥厚させ端面を有する。器表面は摩滅が著しく調整等は観察できない。22は脚部で端部は上方に拡張させ端面には凹線を施す。内面は横方向のヘラケズリ、外面は縦方向のヘラミガキを施す。

23はP74出土の弥生土器甕底部である。外面には縦方向のヘラミガキが見られる。

24はP83出土の弥生土器壺口縁部である。上方に拡張して作り出した端面には3条の凹線が施される。

25はP66出土の土師器壺の底部である。外面に平行タタキを残し丸底である。内面は指頭圧痕を残しナデで仕上げる。内外面ともスス状の炭化物が付着する。

26はP6出土の土師器皿である。内外面に指頭圧痕を残し、口縁部はヨコナデで仕上げる。全体の1/8程度の残存率で口径8.4㎝、器高1.5㎝を測る。

27はP30出土の土師器皿である。口縁部はヨコナデで仕上げ、底部内面は多方向の仕上げナデを施す。全体の1/8程度の残存率で口径9.9㎝、器高2.05㎝を測る。

28はSB2を構成するP23出土の土師器皿である。外面に指頭圧痕を残し、口縁部はヨコナデで仕上げ、底部内面は多方向の仕上げナデを施す。全体の1/3程度の残存率で口径10.5㎝、器高1.85㎝を測る。

29はP19出土の土師器皿である。外面に指頭圧痕を残し、口縁部はヨコナデで仕上げ、底部内面は一方向の仕上げナデを施す。完形で口径8.6㎝、器高は1.25㎝と低い。

30はP13出土の土師器皿である。外面に指頭圧痕を残し、口縁部はヨコナデで仕上げ、底部内面はヘラミガキ状の不定方向の仕上げナデを施す。全体の1/4程度の残存率で口径9.85㎝、器高1.75㎝を測る。

31はP14出土の土師器皿である。外面に指頭圧痕を概2段に残し、口縁部はヨコナデで仕上げる。全体の1/4程度の残存率で口径10.1㎝、器高1.85㎝を測る。これらの器高の浅い皿は13世紀前半頃のものと思われる。

32はP27出土の土師器皿で、体部から口縁部を外反させている。外面には指頭圧痕を残す。全体の

1/4 程度の残存率で口径 10.1 ㎝、器高 3.0 ㎝を測る。

33 は P26 出土の土師器皿で、体部から口縁部を外反させている。内外面には指頭圧痕を残す。口縁部はヨコナデで仕上げる。全体の 1/4 程度の残存率で口径 9.7 ㎝、器高 2.1 ㎝を測る。14 世紀後半代のものか。

34 は P34 出土の土師器皿で、体部から口縁部を外反させている。外面には指頭圧痕を残す。全体の 1/4 程度の残存率で口径 10.65 ㎝、器高 2.75 ㎝を測る。これらの口縁が外反する皿は 14 世紀後半から 15 世紀前半代のものと思われる。

35 は SB 3 を構成する P60 出土の土師器杯で、底部から直線的に立ち上がり、体部から段を残して口縁部に至る。内面は粗いハケ状のイタナデの痕跡が見える。底部内面は不定方向のナデを施し、その後体部・口縁部のヨコナデを施す。全体の 1/4 程度の残存率で口径 10.6 ㎝、器高 3.0 ㎝、底径 6.3 ㎝を測る。

36 は P85 から出土した土師器杯で、外面の一部に指頭圧痕を残すが、回転ナデによって仕上げている。全体の 1/4 程度の残存率で口径 12.0 ㎝、器高 3.1 ㎝、底径 5.75 ㎝を測る。これらの土師器杯は 12 世紀から 13 世紀前半の年代を当てはめることができよう。

37 ～ 42 は土師器鍋であり、外面にはススが付着する。斜めにまっすぐ立ち上がる体部から内側を肥厚させた口縁部へと続く。これらの鉄かぶと形の鍋は 15 世紀から 16 世紀初頭のものであろう。

37 は P22 出土のもので小片である。内側にわずかに肥厚させる。

38 は SB 2 を構成する P23 および周辺の落ち込み、包含層下層のものが接合できた。体部外面には平行タタキが残るが、底部付近はナデ消されている。内面はナデにより調整しているが、底部にはその後ハケを施している。口縁部はヨコナデで仕上げるが、肥厚させた口縁部内面の直下には一部ハケメが残り、ナデが及ばない。1/8 程度の残存率だが、口径 22.7 ㎝、器高 7.9 ㎝の小型のものを復元できた。

39 も SB2 を構成する P23 および周辺の落ち込み、包含層下層のものが接合できた。体部外面には平行タタキが残る。内面はナデにより調整しているが、一部にはハケを残している。口縁部はヨコナデで仕上げるが、肥厚させた口縁部内面の直下には一部ハケメが残る。1/4 程度の残存率で、口径 29.7 ㎝を復元できた。

40 は P31 から出土した小片で、内面がわずかに肥厚する。

41 は P32 から出土している。口縁内面を肥厚させる。外面は斜め方向の平行タタキ、内面はナデ、口縁部はヨコナデが見られる。

42 は P28 と周辺の落ち込みのものが接合できた。口縁内面を肥厚させる。外面は斜め方向の平行タタキ、内面はナデ、口縁部はヨコナデが見られる。

43 は P29 出土の陶器壷である。回転ナデによって仕上げられており、肩部には沈線 1 条を施す。口縁部は丸く肥厚させる。胎土は砂粒が多く、淡黄色の軟質に焼成されており、外面には鉄釉が観察できる。他の遺構出土土器との年代観からすると中国南方産の鉄釉陶器の可能性もあるが、谷奥の鉱山や谷の出口の集落が近世にも存在し、遺跡周辺にも石垣を伴う畑以外に近世頃の生活址が存在した可能性があるため、18 世紀後半の火消壷かもしれない。

44 ～ 46 は備前擂鉢である。ともに口縁端部をわずかに拡張し、内面に櫛による卸目がある。44 は P9 出土で、内湾する口縁部をもつ。口縁端部は内面のみ摘み上げている。

45 は P15 出土で、口縁端部を上下とも摘み出している。

46 は SB 2 を構成する P20 から出土している。口縁端部は上方に摘み上げていると同時に下方もわず

かに摘み出す。これらの鉢は13世紀後半から14世紀にかけてのものである。

47はP43出土の瀬戸灰釉の小壷である。瓶子を模したミニチュアで器壁は著しく厚い。器高8.8㎝、口径2.3㎝、底径3.2㎝を測る。柱穴内に横倒しにして納めてあり、上に縦長の山石を詰めていた。回転糸切痕を残す底部からわずかに立ち上がる平底高台から、緩やかに湾曲させる胴部を経て、屈曲して水平に張る肩部へと続き、短く立ち上がった頸部からわずかに外反して外側に肥厚する口縁部に至る。体部から底部の器壁は非常に厚い。口縁部の2ヶ所に打ち欠きがあり、柱穴内からは破片は見つからなかった。意図的な打ち欠きであろうか。底面および底部外面の一部を残して釉薬が漬け掛けされており、内面も肩部付近まで見られる。肩部には4ヶ所に印花紋が不均等に押されている。13世紀前半～後半のものと思われる。

48・49は各々P17、P12出土の土師製土錘である。48は表面をナデによって仕上げている。重量7.8g。

49は他の土錘に比して精美で丁寧なつくりであり、表面のみにぶい橙色を呈しており赤彩の可能性もある。土製の管玉様のものも想定できるが土錘とする。類例を待ちたい。重量9.5g。

土坑他出土の土器

50～55は西区西南端の段状の落ち込みから出土した土器・土製品である。段落ちの下に柱穴が並ぶが、遺半が調査区外であるため全容は不明である。奈良時代のものであろう。

50は土師器甕で屈曲して外反する口縁部を持つ。外面は口縁部までタタキ成形後、縦ハケ調整を施し、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面の屈曲部以下はヘラケズリか。外面にはススが付着する。

51は須恵器杯口縁部である。

52は須恵器壺或いは甕の口縁部小片である。わずかに自然釉が見られる。

53は落ち込み内の柱穴出土の土師器甕である。まっすぐ直線的に立ち上がる体部から、屈曲して外反する口縁部に続く。体部外面は縦ハケ、内面は指頭圧痕を残すナデによって仕上げる。口縁部はヨコナデ調整である。

54・55は土師製土錘で各々重量5.6gと6.3gを量る。

56はSK9出土の備前擂鉢小片である。口縁端部を上方に拡張する。内面にはわずかに擂目が残る。14世紀代のものである。

溝・流路出土の土器

57はSD2出土の唐津碗或いは皿底部である。小さな削り出し高台から大きく広がる体部へと続く。内面および体部上方に灰釉の施釉が見られ底部外面は露胎である。17世紀初頭。

58はSD4出土の土師器甕口縁部小片である。屈曲して外反する。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケを施す。口縁端部のみヨコナデで仕上げる。

59・60はSD5から出土している。59は羽釜である。体部内外ともナデ調整。鍔から上方の口縁部内外はヨコナデで仕上げる。

60は土師器甕で外面にススが付着する。直線的な体部から屈曲して内湾気味に広がる口縁部に続く。体部外面にはタタキの痕跡が残り、内面は横方向のハケメで調整している。

61はSD6から出土した須恵器底部である。底部外縁の貼り付け高台から直立気味に立ち上がる体部をもつ。壷の底部であろう。

62～70はSD7から出土した。62はヘラ切り底部をもつ須恵器杯である。回転ナデによって成形、仕上げている。

63は小片であるが、須恵器杯口縁部と考える。回転ナデによって仕上げる。

64は須恵器鉢口縁部の小片と考える。回転ナデによって仕上げる。

65～67は須恵器椀または皿の底部である。糸切りの低い平底を有する。65は底部内面に多方向の仕上げナデが見られる。

66にも底部内面に仕上げナデが認められる。

68は輪高台を有する須恵器杯の底部である。低く丸い貼り付け高台をもつ。底部内面に仕上げナデを施す。

69も輪高台を有する須恵器杯底部である。稜をもって直立する貼り付け高台をもつ。底部内面に仕上げナデを施す。

70は須恵器壷の体部で、球形の体部に直立する頸部が付く。

71はSD8出土の須恵器杯底部で、低く扁平な輪高台を有する。

72～75はSD9から出土している。72は弥生土器甕口縁部である。

73ヘラ切り底部を有する須恵器杯底部である。

74は須恵器壷口縁部で、外面には自然釉が付着する。

75は土師質の土錘である。重量は5.2 gを量る。ここまでの溝SD4～9から出土した遺物は11世紀までの遺物で占められている。

76～81は流路1から出土した。流路1は西区を南北に分ける流れであるが、一時に埋まったものではない。北側の一部には新しい堆積があり、81のみはその北縁部分から出土した。

76は土師器皿で糸切り底をもち、回転ナデによって成形されている。76は低い高台をもち、1/4程度の残存率で、口径8.6 cm、器高1.7 cmを測る。12世紀後半頃のものか。

77も土師器皿で糸切り底をもつ。内面に多方向の仕上げナデが施される。

78は須恵器の突帯椀の小片である。貼り付け突帯を巡らす。

79は須恵器底部で回転ヘラ切りの底部には輪高台の剥がれた痕跡が見られる。底部内面には多方向の仕上げナデが施される。

80は須恵器椀口縁部である。内湾しながら立ち上がる体部からわずかに外反する口縁部に続く。口縁外面には重ね焼きの痕跡が見られる。

81は傭前擂鉢である。口縁端部は外側に粘土を継ぎ足して肥厚させ、内側に摘み上げる。内面にはクシ描きの擂目が一部見られる。

82～86は流路3から出土している。流路3は流路1に切られており、竪穴住居2を切っている。

82は弥生土器甕と考えるが、後世のものかも知れない。指頭圧痕を残した外面の屈曲部にはタタキ板の痕跡が見られ、内面は口縁部までハケを当てた後、ナデで仕上げる。屈曲部下方にはヘラ削りが認められる。粗雑なつくりである。

83は弥生土器高杯杯部である。椀形を呈しており、わずかに屈曲して立ち上がる口縁部は丸く納める。内面は横方向のハケの後、ヨコナデで仕上げる。

84は弥生土器高杯脚部である。端部は上方に摘み上げて面を作っている。

85は土師器甕口縁部である。外面はハケによって調整した後、端部をヨコナデで仕上げる。内面下

方はイタナデか。

86も土師器甕口縁部である。外面はハケによって調整し、口縁内面は横方向のハケによって調整後、端部をヨコナデで仕上げる。

87～118は中谷川の旧河道に沿って走るSD11からの出土である。SD11には川原石や土師器鑵が集中して検出されている。溝の資料である限り一括資料とはなりえないが、短期間に溝に投棄していた可能性がある。ここからは15世紀初頭までの遺物が出土している。

87は弥生土器壷口縁部である。広口壷で大きく開いた口縁端部を上下に拡張して面を作る。施紋は見られない。

88は弥生土器甕口縁部である。屈曲して短く開く口縁端部を上下に拡張して面を作る。

89は弥生土器高杯である。小型のもので、口径11.75㎝、器高9.5㎝を測る。短く開く脚端部を上方に摘み上げて面を作る。脚内面は横方向のヘラ削り。外面は杯部にかけて縦方向のヘラ磨きの後、脚端部はヨコナデで仕上げる。杯部は5本の凹線を施し、ヨコナデで仕上げる。杯部内面はナデ調整を施す。以上の弥生土器は溝の中層から出土している。

90は土師器皿である。回転糸切りの底部からやや斜めに立ち上がる口縁部に続く。1/4の残存率で、口径7.8㎝、器高1.85㎝を測る。

91は土師器皿或いは杯で、手づくねによって成形され、指頭圧痕を外面に残す。ヨコナデ及びナデによって仕上げる。口径10.85㎝。

92は土師器皿或いは杯で、指頭圧痕を内面に残し手づくねによって成形されるが、他の土師器皿と比べて器壁が薄い。ヨコナデ及びナデによって仕上げる。口縁部の2ヶ所に煤が付着する。口径12.9㎝、器高2.3㎝。12世紀前半のものか。

93～99は土師器鍋で、外面には煤が付着している。緩く屈曲して直立する体部から大きく屈曲して外方に広がる口縁部を持つ。

93は1/10程度の残存率であるが、口径27.6㎝を測る。口縁部は強く屈曲して外反した後、内湾気味に斜め上方に広がる。外面は一部指頭圧痕を残しながらナデによって調整している。内面は横方向のハケ（6本/1㎝）調整を施す。口縁部はヨコナデによって仕上げる。下層から出土。

94は半分弱の残存率で口径28.0㎝を測る。口縁部は稜をもって強く屈曲して水平に開いた後、屈曲して斜め上方に広がる。外面は一部指頭圧痕を残しながら一部に縦方向のハケを施し、その後ナデ消している。内面は横方向のハケ（6本/1㎝）を長く施す。口縁部は横方向のハケ調整後、端部をヨコナデによって仕上げる。

95は半分弱の残存率で口径28.6㎝を測る。口縁部は屈曲部に段をもって水平に開いた後、強く屈曲して直立する。外面は縦方向のハケ状のナデを施し、その後ナデ消している。内面は回転を利用した横方向のハケ（8本/1㎝）を長く施す。口縁端部はヨコナデによって仕上げる。

96は底部を失っているものの上半はほぼ完形で口径27.2㎝を測る。口縁部は稜をもって屈曲して水平に開いた後、内湾して斜め上方に広がる。外面は一部指頭圧痕を残しながらおそらくタタキ成形し、横方向のハケを施し、その後ナデ消している。下半は摩滅している。内面は横方向のハケ（6本/1㎝）を施すが、一部粗いハケも見られる。口縁部は横方向のハケ調整後、端部から外面をヨコナデによって仕上げる。

97は約半分の残存率で口径28.6㎝を測る。口縁部は強く屈曲して開いた後、内湾気味に斜め上方に

広がる。外面は一部指頭圧痕を残しながらその後ナデ消しており、下半は非常に粗いハケによって調整される。内面は横方向のハケ状のナデを施し、更にナデ消す。下半には外面と同じ原体のハケを一部に用いている。口縁部はヨコナデによって仕上げる。

98は約半分の残存率で口径29.7㎝を測る。口縁部は強く屈曲して斜め上方に広がり、端部を上方に摘み上げて内面をわずかにくぼませる。外面は一部指頭圧痕を残しながら一部に縦方向のハケを施し、その後ナデ消している。下半は横方向のハケ（5～7本/1㎝）を施す。内面は横方向のハケ（5～7本/1㎝）を施す。口縁部はヨコナデによって仕上げる。

99は3/4の残存率で口径30.85㎝を測る。口縁部は稜をもって強く屈曲して水平に開いた後、内湾気味に大きく屈曲して立ち上がる。外面は一部指頭圧痕を残しながらおそらくハケ調整を行いその後、丁寧にナデ消している。下半は横方向のハケ（5～10本/1㎝）を施す。内面は横方向のハケ（6本/1㎝）を回転を利用して長く施す。下半は非常に粗いハケ（5本/1㎝）で調整している。口縁部はヨコナデによって仕上げる。

100～105は土師器羽釜であり、外面には煤が付着している。100は3/4の残存率で、口径22.8㎝、器高12.5㎝を測る。平底気味の底部から緩やかに立ち上がり、ほぼ垂直な口縁部へと続く。口縁下には水平からやや下がり気味の鍔が付き、等間隔の指頭圧痕を残してナデている。外面の調整は縦方向のハケの後、横方向のランダムな粗いハケを底面まで施す。内面は口縁付近では斜め方向のハケの後、ナデ状の細かいハケ（9本/1㎝）を横方向に回転を利用して底面まで施し、端部はヨコナデで仕上げる。

101は1/8の残存率で、口径29.5㎝を復元した。外面は粗い縦方向のハケをナデ消しており、内面はナデ状の細かいハケ（10本/1㎝）を横方向に回転を利用して施している。口縁端部から鍔にかけてはヨコナデによって仕上げている。

102は1/4弱の残存率で、口径17.05㎝、器高10.2㎝を復元できる小型のものである。他のものと比べて鍔より上の口縁部が長い。外面は指頭圧痕をのこしてナデ調整されており、内面はナデ状の細かいハケ（15本/1㎝）を横方向に回転を利用して施している。

103は1/2の残存率で、口径23.5㎝を測る。やや内傾した口縁部下にほぼ水平に鍔が付く。外面は指頭圧痕を残してナデ調整されており、鍔下部には等間隔で指の痕跡が残る。内面は口縁付近では斜め方向のハケの後、ナデ状の細かいハケ（8～12本/1㎝）を横方向に施す。口縁部末端から鍔の下面まではヨコナデで仕上げる。

104のやや内傾した口縁端部には斜めの面をもつ。外面はナデ調整、内面は口縁付近では斜め方向のハケの後、ナデ状の細かいハケを横方向に回転を利用して施している。他のものに比べて硬質に焼成される。

105は口縁部の立ち上がりの短いものであるが、器壁が厚く大型のものかもしれない。口縁端部は丸く摘み上げており、鍔の下面は強く屈曲する。内面は横方向の粗いハケの後、ナデによって仕上げる。最上層から出土している。

106は須恵器椀或いは皿で、回転糸切りの低い底部をもつ。底径6.2㎝。

107は須恵器杯で、ヘラ切りの底部に低い高台をもつ。底径9.9㎝、焼成不良。

108は貼り付け高台をもつ須恵器杯小片である。

109は貼り付け高台をもつ須恵器壺の底部である。底部周縁に貼り付けた高台はやや外傾する。底径16.2㎝。

110は東播系須恵器鉢の口縁部で、端部を上方に拡張している。

111～114は軟質の須恵器系の甕であり、亀山焼と思われる。111は器表面の剥離が著しい。頸部には指頭圧痕を残す。

112は甕の上半部で1/4程度の残存率で口径36.1㎝を測る。短く緩やかに開く口縁部の端部は上方に摘み上げ端面を作る。外面には平行タタキを残す。

113も大型の甕の頸部で、器表面の摩滅が著しいが、内外面ともヘラケズリで調整し、頸部はナデで仕上げる。

114は大型の甕底部である。外面は縦方向のハケで調整し、最下部にはヨコナデを施す。一部には黒斑が見られる。

115は玉縁をもつ白磁の椀で、外面下部を除いて釉がかかる。下層から出土している。

116は竜泉窯系の青磁椀小片で、外面には細弁の蓮弁紋を施す。蓮弁紋は上端の花弁末端を連続して描く。最上層から出土しており、若干他の土器よりは時期的に新しく15世紀に入るものであろう。

117は青磁の皿小片で、大きく外反した波状の口縁をもつ。内面には劃花紋を描く。最上層から出土している。

118は白磁の端反りの口縁部をもつ椀の小片である。他の土器より古く13世紀前半頃のものであろう。

旧河道出土の土器

119～124は旧河道から出土した。旧河道は大小の砂礫によって埋没していたが、西半の一部にはシルトから粗砂の堆積があり、そこから遺物が出土した。奈良時代のものが主となる。

119は土師器の甕である。屈曲して外反気味に開く口縁部をもつ。外面は粗い縦方向のハケ調整後、下半には縦方向のヘラミガキを施す。内面は指頭圧痕を残してナデによって仕上げる。口縁部は内面に粗いハケを一部残してヨコナデによって仕上げる。

120は土師器鍋の口縁部である。緩やかに屈曲して開く口縁部をもつ。外面は指頭圧痕を残して縦方向のハケで調整し、内面は横方向のハケで調整する。口縁端部はヨコナデで仕上げる。

121・122は須恵器壺口縁部である。121は細頸壺、122は広口壺である。

123は須恵器壺体部である。貼り付け高台の底部からまっすぐ立ち上がる体部へと続き、屈曲して張る肩部をもつ。外面肩部には多方向の仕上げナデが、内面底部にも多方向の仕上げナデが施される。

124も123と同様の須恵器壺の底部であろう。底部内面には多方向の仕上げナデが施されている。

包含層他出土の土器

125～194は西区の包含層から出土した。

125～137は弥生土器である。125は甕口縁部で、屈曲して開く口縁端部を上方に肥厚させている。内面下端にはヘラケズリが見られる。

126刻み目を施した貼り付け突帯をもつ頸部の小片である。

127は櫛描き波状紋と直線紋を施した肩部の小片である。

128・129は甕の底部であろう。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラケズリを施す。

130は高杯杯部である。椀状を呈した体部から両側を肥厚させて面を作る口縁部に至る。外面は横方向のヘラミガキ、内面はハケ調整の後斜め方向のヘラミガキを施す。

131・132も高杯杯部である。131では緩やかに屈曲して垂直に立ち上がる口縁部の端部は外側に肥厚させて上面を作る。外面には4条の凹線が施される。

133は高杯の脚部から杯部にかけての破片で、円盤充填法で作られる。杯部の外面は縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のヘラミガキを施す。脚部外面には4条の凹線を施し、1ヶ所には焼成後の貫通しない穿孔が見られる。脚部内面には横方向のヘラミガキ後、一部ナデによって仕上げている。器表面は荒れているが、外面の一部には赤色顔料が見られ非常に丁寧なつくりである。

134～137は高杯脚部である。脚端部を上方に拡張して端面をつくる。134には外面に3段のヘラ描き複合鋸歯紋を2重の沈線を挟んで描く。

135は内面に横方向のヘラケズリが見られる。

138は焼塩土器で、指頭圧痕を残して手づくねで成形される。胎土には雲母片を含む。奈良時代から平安時代のものである。

139・140は土師器皿で指頭圧痕を残して手づくねで作られる。

141も手づくねで作られた土師器皿であるが、直線的に開く口縁部をもつ。15世紀前半頃のものであろう。

142は焼成不良の須恵器杯で、底部はヘラ切りの後、ナデている。口縁部外面には重ね焼きの痕跡が見える。

143は小型の土師器甕口縁部である。外面は縦方向のハケ、内面はハケの後ナデで仕上げ、ヨコナデで仕上げる口縁部内面にはハケが残る。

144・145は土師器甕口縁部である。内面にはハケを施す。145は口縁端部を摘み上げている。

146は土師器の把手で、ハケによって調整している。

147は土師器鍋で、屈曲して斜め上方にまっすぐ開く口縁部をもつ。外面は横方向のハケ、内面は斜め方向のナデ状のハケを施す。口縁部はヨコナデで仕上げる。

148は土師器羽釜で、内面には横方向のハケ、口縁端部から外面はヨコナデで仕上げる。

149～154は鉄かぶと形の鍋で、外面には平行タタキが残り、口縁部はヨコナデで仕上げる。150～152は内面を大きく肥厚させる。15～16世紀のものであろう。

155は播磨型といわれる羽釜で、低い鍔を口縁直下にもつ。口縁端部は斜めに面をもつ。小片を図化したため傾きは若干緩くなるかもしれない。15～16世紀のものであろう。

156・157は瓦質の火舎・香炉で所謂奈良火鉢である。156は屈曲して斜めに開く口縁部をもち、口縁端部は上方に摘み上げる。ヨコナデで仕上げる。

157は内湾した口縁直下に低い鍔を有する。ヨコナデ及びナデによって調整している。156・157とも14～15世紀のものである。

158は丸瓦である。黒灰色を呈した燻瓦で、玉縁をもつものである。外面には丁寧にヘラを当てて磨いており、内面には布目及び縄の痕跡が残る。

159も丸瓦の小片で淡黄色を呈し、内面に布目を残す。側面には面取りを施す。南側の小犬丸中谷廃寺のものに類する。

160は土師質の土錘で、重さは2.8gを量る。

161～165は須恵器杯蓋口縁部である。すべて1/8以下の残存率である。161・164は外面に回転ヘラケズリの痕跡を残す。162・163では内面に仕上げナデを施すが、162では非常に滑らかになっており、

硯に転用された可能性がある。

166～171は須恵器の貼り付け高台をもつ杯で、底部内面に仕上げナデを施すものが多い。

172は須恵器の糸切りの低い高台をもつ椀である。

173・174は須恵器の貼り付け高台をもつ壺の底部である。

175～178は東播系須恵器鉢である。175は小型のもので小片であるが、口径14.8㎝を復元した。上方に拡張して断面三角形を呈している。

176は残存率1/8で、口径28.6㎝を復元した。口縁を拡張して上方に摘み上げ端面を作り出す。内面は著しく荒れており、使用痕と思われる。

177・178は小片であるが、口縁部を玉縁状に肥厚させる。177は片口の部分である。これらの鉢は13世紀後半から14世紀のものであろう。

179は須恵器甕口縁部である。短く湾曲した口縁端部を拡張して垂直の面をもつ。外面には平行タタキが残る。

180は須恵器体部で、外面の上端には沈線を施し、自然釉が付着する。内面には赤褐色の付着物が見られる。

181～194は陶器・磁器である。181は北端の石垣裏込めやSD11の最上層から出土した備前壺である。頸部から口縁部は短く口縁端部は外側にわずかに突出させて丸く納める。肩部の上方には櫛描き波状紋を描いている。15世紀前半までのものであろう。

182～185は備前甕口縁部である。182・183は口縁端部を丸め込んで玉縁を作っている。

184は玉縁の幅が若干大きくなり、185では大きく折り返して幅広の縁をもち、凹線を施す。14世紀から16世紀後半のものであろう。

186・187は備前擂鉢である。186は口縁部外面に粘土を貼り付けることにより肥厚させ、面を作り出している。端面には浅い凹線を施す。櫛描きの卸目を施している。16世紀後半頃のものであろう。

187は口縁部・体部が1/2程度の残存率で、口径30.0㎝、器高11.7㎝を測る。口縁端部を上方に摘み上げて拡張し、端面を作る。内面には9本単位の櫛描の卸目を疎に施す。

188・189は白磁底部である。露胎の削り出し高台をもつ。189は円盤状に打ち欠いており、面子としている。

190は唐津皿で、緩やかに内湾する体部の内外面に灰白色の灰釉をかけており、底部は露胎となる。底部は回転ヘラケズリで成形しており、低い三日月高台が削り出される。目当は認められない。口径11.2㎝、器高3.5㎝、底径4.2㎝を測る。17世紀前半代のものであろう。

191は瀬戸平椀の口縁部である。浅黄色の釉がかかる。14世紀後半から15世紀初頭のものであろう。

192は胎土目唐津で、露胎の低い削り出し高台をもつ。灰オリーブ色の釉がかかる。17世紀初頭。

193は内面に砂目をもつ唐津で、削り出し高台を有する。内面には灰白色の釉がかかる。17世紀前半。

194は瀬戸天目の椀で、削り出しの内反高台をもつ。外面は化粧土をかけているが釉は及んでいない。内面には鉄釉をかけている。15世紀前半頃のものであろう。小片であるが復元すると底径3.3㎝の小型の椀となる。

第3節　東区出土の土器

前述のように東区では削平が著しく、顕著な包含層も存在していない。遺構からの遺物の出土もない。出土した遺物は人力掘削中に出土したものである。

195は土師器皿である。手づくねで作られ、器壁が厚く、大きく歪んでいる。3/4の残存率で、口径7.3㎝、器高1.7㎝を測る。

196は土師器杯である。1/4の残存率で口径10.75㎝、器高2.2㎝を復元した。

197は新しい時期に掘られた溝から出土しており、他のものと同様の扱いをする。土師器羽釜の口縁部で、非常に短い口縁部の立ち上がりとその直下の幅の狭い鍔をもつ。内面には横方向のナデ状のハケが見られる。

198も羽釜口縁部で、内傾した短い口縁部直下に鍔が付く。

199は土師器鍋の脚と体部の接合部である。ハケによって調整した後、脚部はナデによって仕上げる。

第4節　石器・石製品

石器・石製品はすべて西区から出土しており、S1・S10・S11は竪穴住居SH2から、S5はSH1から出土した。S6・S7はSD11から出土している。他のものは、包含層や遺構検出中の出土である。

S1はサヌカイト製の石鏃の未成品と考えているが、石錐の可能性もある。薄い剥片の両側面に二次加工を施し、刃を作り出すが確指である。

S2はサヌカイト製の石包丁と考えられる。尖頭器の先端とするには厚みがなく、一方の刃の欠損部分近くは刃潰し或いは刃を作り出していない。肉眼観察では香川県産のものであろう。北半の遺構面直上で出土した。

S3・S4は川原石を用いた磨石と考えるが、中世の柱穴等が多数検出された地区の包含層から出土しており、弥生時代のものではなく、後世のものかもしれない。

S3は全体的に平滑であるが、上面の一部が特に滑らかになる。一部側面にかけて敲打痕が見られる。下面がやや丸い。重量69.9ｇ。

S4も全体的に平滑であるが、上面がやや丸く、下面がやや平滑である。短辺側や一方の側面に敲打状の痕跡が見られるが顕著ではない。48.1ｇ。

S5はSH1の掘溝北側から出土した磨石である。側面などは平滑であるが、顕著な使用痕は観察できない。重量74.4ｇ。

S6・S7はともにSD11から出土した砥石である。SD11からは弥生土器なども出土しているが、主体となる時期は14世紀であり、これらの砥石もその時期のものであろう。

S6は下層から出土した。にぶい褐色の縞模様を呈した石材を用いている。凝灰岩質砂岩であろうか。一方の短辺は欠損しており、他方の短辺は切断した痕跡が見られる。3面を使用しており、一側面は自然面を残す。使用面は緩やかに湾曲しており、一部には斜め方向の強い擦痕が見られる。中砥であろう。

S7は両短辺とも欠損或いは粗雑な切断面となり、裏面も剥離したような自然面を残す。但し裏面の一部の凸面には摩滅した痕跡があり、表面の使用に際して当たった痕跡と考えられる。側面には上下方向の刻み目状の痕跡や長軸方向の段が残されており、石材から切断した際の痕跡であろう。砥石として

使用された表面には非常に細かい擦痕が観察できる。赤橙色の粘板岩質の仕上げ砥であろう。

S8～S9は近隣で産出すると思われる板状に剥離しやすい軟質の変成岩の側面を加工して楕円形の円盤状に加工したものである。包含層出土であり、所属時期、用途とも不明である。

S10はSH2の最上層から出土しており、珪化木のような硬く薄い板状の石の周囲を打ち欠いて円盤を形作る。側面の一部には磨耗した痕跡が見られるが、人為的なものかは不明である。表面の一部にも磨耗が見られる。用途・所属時期は不明である。

S11はSH2の北側周溝上に一部かかるようにして、床面から出土した台石である。緻密な山石の上面のみが頭著に使用されており、非常に平滑になっている。一部は窪みや周縁の角まで磨り減っている。砥石のような顕著な擦痕は認められず、おそらく植物質のものを用いて平滑になったものであろう。使用された面積は縦約33㎝、横約22㎝に及ぶ。底面は平らではなく、出土時にも平滑面が傾斜していた。重量13.5ｇ。

第5節　金属製品

金属製品は比較的多く出土しており、ほとんどが鉄製品である。95点出土したうち、写真のみ掲載のスラッグ1点を含めた58点を取り上げた。柱穴や土坑、溝などの遺構出土のものはできるだけ掲載したが、意図的に埋納された状況のものはない。M1・M2は銅製品、M3～M56は鉄製品である。M1～M51は西区、M52～M56は東区から出土している。

金属製品の種類には、刀装具や鏡、鉄鏃玉等の武器、鎌や唐鍬先等の農具、鑿、楔等の工具などがあり、最も多く見られるのは釘である。34点図化したが、全容がわかるものは少ない。先細りの形状で、断面方形に鍛造しており、上端部に切れ目を入れ、叩き延ばした後に折り曲げた作りである。時期差を慮外しても大きさには差があり、おそらく用途別に、長さ或いは重さによって区別して作られたものであろう。出土したものではM12のような長さ5㎝までの小型のもの、M18のような中型のもの、M3のような長さ10㎝近い大型のものが見られる。更に全容は不明であるがM22のような特大のものも見られ、中型のものも更に数種類にわかれそうである。

鑿・楔としたものは6点出土しており、これらを鍛冶道具として集落内で小鍛冶をおこなっていた傍証と考える。多量に出土した釘も再利用するために集められたものや、再生産されたものも含まれるのであろう。

銅製品

M1は刀装具の切羽金具で、銅の薄板（厚さ約0.1㎝）を加工して作られている。表面の劣化が著しく金箔などは確認できないが、おそらく金銅製品であろう。この金具に装着できる刀は厚さ0.7㎝、幅2.7㎝以下のものである。北端のSD11上面から出土した。SD11上面には石垣暗渠があり、出土した土器から14～15世紀のものであろう。

M2はSD4とSD5に挟まれた地区の包含層出土の銅銭である。北宋銭の元祐通寶（初鋳1086年）で、直径2.35㎝、孔辺0.65㎝、厚さ0.15㎝を測るが、劣化が著しい。大谷遺跡での銅銭の出土はこの1点のみである。

西区遺構出土の鉄器

鉄器が出土した遺構は西区に限られ、特に流路1やSD4、SD3に囲まれた方形区画内のSB2～4の周辺に集中した。いずれも意図的に埋納されたものではない。

M3はP61出土の釘で下端部を欠損しているが、残存長9.8㎝、最大厚0.85㎝の大型品である。

M4はP46、M5はP29から出土した釘である。M6はSB5の西北隅のP55から出土しており、釘と同様に上端部を折り曲げているが、断面が扁平であることから楔と思われる。

M7～M11はSK7から出土している。M7～M9は釘で、M7・M8は両端を欠損している。M9は先端部を欠損しているが、残存長4.4㎝、最大厚0.65㎝の中型のものである。

M10は楔或いは鑿と思われ、扁平な先端には刃をもち、上端部は欠損しているが斜めに曲げている。

M11は板状を呈した鉄片でおそらく鋳造品と思われる。

M12はSD5出土の釘である。長さ4.9㎝、厚さ0.35㎝の小型品である。

M13･M14はSD7から出土した。M13は釘頭部である。M14は板状を呈しており、一辺に刃が付く。刀或いは鎌の一部であろうか。

M15～M17は流路1から出土した。流路1は東側の谷から流れ出ており、時期幅がある。流路の北半には新しい流れがあり、中世まで流れているようである。鉄器が出土したのは南側で、平安時代を中心とした土器が出土している。

M15は紡錘車の円盤部分で上下に軸部が付く。軸部の先端は共に欠損しているようである。直径3.0㎝の円盤の下面は軸を中心にわずかに盛り上がった形状を呈している。上面は平坦で、直径0.25㎝の軸が付く。

M16･M17は釘である。M16は下端を欠損しているが、小型のものである。M17は頭部の屈曲を失っており、曲がっているが残存長6.1㎝の中型のものである。

M18～M23はSD11から出土している。出土した土器から、先の銅製刀装具（M1）とともに14世紀から15世紀のものであろう。M18～M22は釘である。この内、M20・M21は頭部を失って下端部のみとなる。

M18は直角に曲がっているが全容がわかる。全長7.5㎝、厚さ0.6㎝の中型品である。

M19は接合できないが先端部まで残っており、残存長5.3㎝の中型品である。

M22は頭部のみ残存しているが、幅1.7㎝と他の大型品と比しても大きい。

M23は上端部を失っているが、幅1.35㎝、厚さ0.9㎝と扁平で、下端部は片刃状に刃をつけた楔である。

西区包含層等出土の鉄器

M24～M51は西区の包含層等出土のものである。この中でM27・M31・M38が西区北半で出土した以外は流路1とSD4、SD3に囲まれた柱穴等が集中する方形区画内からの出土である。

M24は甲冑の小札で、高さ6.35㎝、下幅2.6㎝、上幅2.5㎝、厚さは0.2㎝の小型のもので、上辺は偏向した位置から斜めに落としている。威孔2行の並札で計14孔が穿たれる。

M25は先端部をわずかに欠くが、残存長5.45㎝、幅1.5㎝、厚さ1.45㎝の大きさで、方角柱の先端側に向かって四方から細くなる形状をもつ。上面は斜めに平坦面を持つ。鑿と考える。

M26は楔である。先端部を欠くが、残存長6.3㎝、幅1.55㎝、厚さ0.55㎝の扁平な、先端に向かって細くなる形状を示す。頭部はわずかに折り曲げてある。

M27は楔である。M26と同じ形状であるが、幅1.3㎝、厚さ0.4㎝とやや小振りとなる。

M28は直径1.2㎝、重さ3.6ｇの鉄球である。薄板状の甲張りが残り、鋳造の鉄砲玉と思われる。

M29は両端を欠くが、幅1.1㎝、厚さ0.4㎝の片側面に刃が付いており、刀子であろう。

M30は鎌である。刃幅2㎝程度の小型のもので、湾曲した刃部をもち、扁平な基部を内側に曲げて柄との装着に備える。

M31・M32は鋳造の唐鋤の刃ではないかと考える。M31は内側に木部を装着する溝が作られており、側面の部分であろう。

M33は漏斗状の中空の円錐形を呈したもので、東区出土のM53も同様の形態であり、小型の道具の石突かもしれないが、用途は不明である。

M34は欠損しているが、細い板状の鉄板を半環状にしたもので、一方の端部は斜めに成形している。環状になるものであるなら、例えばM30などの鎌や刀子などの鉄器を柄に装着する際のかしめの金具と思われる。

M35は細い板状の鉄板を折り曲げるか、切れ目を入れてＶ字形にしたもので、一端は横に開く。用途は不明である。

M36～M50は釘である。大型のもの、中型のもの、小型のものがある。M36～M40は小型のものであり、うちM38・M40は先端部が極度に曲がっている。

M41～M43は中型のものである。

M44は先端部を欠くが、幅・厚さとも0.8㎝で大型のものであろう。

M45は先端をわずかに欠くが、残存長8.3㎝、幅0.55㎝、厚さ0.65㎝の中型のものである。

M46は全体が湾曲しているが、全長8.9㎝、幅・厚さ0.8㎝の中型のものである。頭部の折り曲げた部分が欠損している。

同じく中型のものとおもわれるM47は上部がらせん状に大きく曲がっている。

M48・M49は過半を欠損しているが、幅が0.65㎝以上あり、中型のものであろう。

M50は両端を欠損しているが、残存長が7.9㎝と中型以上のものである。但し、幅・厚さが0.45㎝以下と細い。

M51は釘状の形態であるが、断面が円形を呈しており、細い鉄棒状のものである。

この他に西区北半から鉄滓（M58）が出土している。直径約5㎝、厚さ約2.7㎝、重さ94.5ｇを測る。

東区出土の鉄器

東区から出土した鉄器はすべて包含層等からの出土で、遺構に伴うものではない。

M52は円錐形の底部に突起を有するもので、突起の上部は欠損しているかもしれない。

M53は中空の円錐状の形態をもち、上端を欠損している。西区出土のM33と類似した形態であるが、M33に比べてやや細長い。

M54～M56は釘で、小型から中型のものである。M56は先端をわずかに欠くが、長さ5.7㎝、幅0.75㎝を測る。先端部が2ヶ所折れ曲がっている。

M57は鋳造の鋤先であろう。断面Ｖ字形で柄を装着する溝の深さは0.5㎝と浅く、基部に近い部分であろう。

第6節　小　結

狭い谷奥の集落址にもかかわらず、幅広い時期の土器・石器・金属器などの遺物が出土した。

弥生土器は中期後半のものを40点余り図化できた。一括性があると考えられるのは竪穴住居SH2出土のものに限られるが、その他の土器も時期差を看取できるものはない。限られた短い期間のみここに集落を営んでいたものであろう。出土した土器の中には、垂下口縁部をもち口縁内面に突帯を貼り付ける広口壺は見られない。壺口縁部に櫛描波状紋をもつものがある。体部に列点紋や櫛描紋をもつものも存在している。また、高杯の脚には透かしは施されず、外面に紋様を施すものは少数である。などの特徴があり、中期後半の中でも更に後半、つまり中期末の特徴を示すものが主体となる。

同時期に所属すると思われる石器の出土点数は非常に少ない。竪穴住居址の調査中も気をつけていたが、埋土中や床面からはサヌカイトの剥片等は検出されておらず、サヌカイト製の石器を盛んに製作していた様子はない。確実にこの時期に所属するものはなかったが、鉄器を使用していたのであろう。特徴的なのはSH2から出土した台石と磨石である。米以外の食糧生産に用いたものか、山で採れる植物を加工するのに用いて道具つくりをおこなったものか、一般的な米作りを主体とした集落ではないと考える。

奈良時代から平安時代の土器も少なからず出土しているが、遺構に伴うものは少ない。供膳具・煮沸具とも出土しており、この地で生活していたものであろう。礎は転用礎の可能性があるものが1点ある以外は全くなく、緑釉陶器・灰釉陶器などの特殊なものも全くない。1点だけではあるが焼塩土器が出土している。また、鉄製紡錘車もこの時期のものであろう。鉄製紡錘車は古墳時代終末期に用いられるようになり、平安時代には類例が急増する。この時期の遺物は8世紀前半に遡るものから11世紀前半頃まで消長・多寡はあるが、同じような出土状況を示している。

11世紀後半から12世紀前半までの遺物は見られず、遺跡は衰退するようである。次に集落が営まれるようになるのは早くても12世紀後半に入ってからであろう。14世紀になって集落はピークを迎える。在地産の土師器の供膳具・煮沸具を中心に東播系須恵器、備前、奈良火鉢、瀬戸などの国産の陶器類や青磁・白磁などの中国産の磁器類が東西の各地から搬入されている。13世紀のものとされる古瀬戸灰釉小壺(47)は東日本中心に流通しており、西日本にもたらされた希少な例である。地鎮具として使用されたものであろう。瀬戸はその後、灰釉平椀、天目椀なども搬入されている。

在地産の土師器皿や杯は12世紀まで遡り得るものも見られるが、点数は非常に少ない。量的に多くなり、柱穴内などに意図的に入れられたものは浅い手づくねのもので13世紀の前半のものである。小片になっているため図化したものは少ないが、14世紀～15世紀前半の口縁が外反する皿も点数的には多い。また、煮沸具も13世紀の後半の口縁部が屈曲して開く鉄鍋形の鍋から14世紀の後半の羽釜形のもの、その後、15世紀にはいると大きく開いて口縁部を肥厚させる鉄かぶと形の鍋へと形態を変えながらも引き続いて出土している。この遺跡では鉄鍋形のものと羽釜形のものが、溝内ではあるが共伴している。

備前焼は擂鉢が主体であるが、甕・壺も数点出土している。一部13世紀後半まで遡り得るものから16世紀後半までのものが出土しており、主体となるものは14世紀代のものである。

東播系の須恵器鉢も13世紀後半までのものが数点出土しているが、13世紀後半からは産地との距離も近い備前擂鉢が卓越するようである。

これらの各地の土器は、谷の出口を東西に走る山陽道を流通の動脈として搬入されたものであろう。そして17世紀の唐津が搬入される頃には集落は衰退してしまうようである。

この時期の生活の一端を示すものに金属器がある。多量の鉄滓や鉄滓、焼土が示すように小鍛冶が集落（屋敷内）でおこなわれていたようである。おそらく釘などの生活品を打っていたものだろう。鉄滓の性格は不明であるが、16世紀中頃以降の鉄砲玉には甲張りが観察されることから、集落の末期には鋳物鍛冶もおこなわれていたのかもしれない。但し、鞴の羽口の出土もなく、鉄滓や焼土も少ないことから、屋敷内での小規模な鍛冶と考えられる。刀装具や甲冑の小札の出土や趣向品である内外の茶碗の出土から地侍的な武士階級かそれに準ずる人物が屋敷の主であったと考えられる。

参考文献

岸本道昭　1994「播磨弥生中期後半の土器編年新考」『養久山・前池遺跡』龍野市文化財調査報告15 龍野市教育委員会

山本三郎　1999『明石海峡・明石川流域における弥生時代の高地性集落小論』『あまのともしび－原口先生古希記念集－』

小森俊寛、上村憲章 1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所

百瀬正恒、近江俊秀 1995「各地の土器様相　近畿」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

岡田章一、長谷川所 2003「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

盛澤良祐 1996「中世古瀬戸の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム資料集　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

間壁忠彦、間壁葭子 1966～1968・84「備前焼研究ノート」1～5『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18

乗岡　実 2000「備前焼擂鉢の編年」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

乗岡　実 2000「中世備前焼案（壺）の編年案」『第2回中近世備前焼研究会レジメ集』中近世備前焼研究会

松岡千寿 2003「播磨出土の備前焼」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

森田　稔 1986「東播磨中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』3　神戸市立博物館

森田　稔 1995「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

立石堅志 1995「奈良火鉢」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社

森田　勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№2

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』№2

永井久美男 2002「新版中世出土銭の分類図版」高志書院　財団法人古代学協会 1983「法住寺殿跡」平安京跡研究調査報告　第13輯

松田真一 1974「鉄製鋳鍾率とその出土遺跡」『宇陀・丹切古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第30冊　奈良県教育委員会

出土遺物については、山本三郎氏、岡田章一氏の教示によるところが大きい。記して感謝します。

第4章　ま　と　め

遺跡のおかれた環境

小犬丸大谷遺跡は、兵庫県西部の龍野市に所在している。揖保川の西岸、揖西町の小犬丸は、山に囲まれた東西約3km、南北の狭いところで約200mと細長い盆地上の地形を呈しており、南東部のみ山が切れて、南への展望が開けている。東麓の琴坂と西側の二木峠を貫くように古代山陽道が通過するこの地は交通の要衝として栄え、古代には布勢駅家や小犬丸中谷廃寺などの官衙・寺院が設けられている。

それ以前には小犬丸中谷廃寺で縄文土器等が出土し、落し穴状の土坑が検出され、小犬丸遺跡では弥生中期から後期の土器が出土し、後期の竪穴住居が見つかるなど、遺構や遺物は散見されるものの大きな規模の集落は営まれてはいなかったようである。古墳時代にはいっても集落址・古墳は非常に少なく、小犬丸中谷古墳や津原古墳群で横穴式石室が確認されているに過ぎない。

この地が大きく開かれるのはやはり、山陽道が設置されて以降であろう。かたや粉壁瓦葺の駅家と、同じく瓦葺の築地を廻らせた寺院がこの細長い地形の中に建ち並ぶ様子は、国府界隈は別として播磨国内でも威容を誇っていたものであろう。

その後、左弁官下文建久八年（1197）四月三〇日「壬生文書」によると、この地を巡った土地争いがおこる。すなわち、穀倉院領小犬丸保と大納言平頼盛領布施荘との間の境相論である。布施郷が応保年中（1161～1163）に平清盛の弟である頼盛の家領となり布施荘が成立するが、ここは以前から穀倉院領の小犬丸保が成立していた。そのため頼盛は強引に山野・畠地・在家・池を兆し、小犬丸保の領有権を作田のみに限った。そこで小犬丸保の領民が訴状を出したものである。この訴状の中で領民は「往古計略を廻らせ、功力を尽し、更に池を構築し、作田に引き入れた。」とあり、12世紀中頃までに地元の百姓が溜池を修築したことが見える。揖保川の西、揖西の地は揖保川の支流が数本流れるが、播磨国風土記に見られる美奈志川（水無川）の水争いの記述のように水量の少ない川が多い。中谷川も小犬丸随一の河川ではあるが水量は少ない。この地の人々が古くから耕作に際しての水確保に苦労していたことがわかる。

その後、この地は布施荘が平家没官領として収公され、播磨国が後白河法皇の分国になった寿永二年（1183）以降に穀倉院領に復した後、14世紀には御宇多院領となるらしい。14世紀の初め、小犬丸保の地頭岩間三郎入道は正和3年（1314）赤穂郡矢野荘の寺田悪党に加担している。元応元年（1319）六波羅探題は播磨にも使者を派遣して悪党の鎮圧をはかっている。この時期は悪党の全盛期である。この地域の悪党的人物の代表として赤松円心がおり、円心は建武年中（1334～1338）、小犬丸の南西の山塊に光明山城を築いている。この城は、別名紫雲城や小犬丸砦などとも呼ばれ、西の感状山城・白旗城から東の平井城・龍野城に通ずる山陽道の交通の要衝を扼する城である。赤松上総介義則などが居城したとあり、天正（1573～1592）初め頃、羽柴秀吉の播磨攻略によって落城したといわれる。

この小盆地の中央部には、北西に約1kmにわたって伸びる中谷川の谷があり、大谷遺跡はその谷の中にある。この谷は南西部の大蔵内の谷とともにこの小盆地から切れ込む最も大きな谷のひとつである。この谷の上流の山中には鉱山があったと地元の方に伺った。1868年頃銅鉱の採掘をおこなった大谷鉱山のことであろう。谷の出口付近には宿垣内の字名が残る。大谷遺跡はこの中谷川の谷口から約500m奥まった川の東岸の地点にあり、東から合流する小谷の扇状地上に立地する。

遺構、遺物

弥生時代中期末から近世まで、遺跡が辺縁な立地にもかかわらず幅広い年代の遺物が出土しており、断続的に集落が営まれていたものである。

弥生時代中期末には竪穴住居２棟が営まれる。検出できなかった住居があったとしても、１～２単位集団のみのごく小規模な集落であり、しかも短期間で姿を消している。この時期、揖保川流域のみならず瀬戸内海沿岸周辺では集落の立地に大きな変化が見られる。高地性集落の出現もその変化のひとつであろう。近辺でも竹原・中山遺跡など水田耕作に適さない立地の集落が現れる。また、太子町亀田遺跡のような扇状地上に立地する集落や龍野市寄井遺跡のような谷間の集落が現れるのもこの時期である。

鉄器が普及し始めるのもこの時期である。鉄器の普及は直接、森林の伐採を促進するのみならず、スキ・クワなどの土木具の量産を促し、新たな開発へと人々を駆り立てたのであろう。

明石川流域の玉津田中遺跡ではこの時期に洪水によって集落が被害を被ったことが発掘調査で明らかになり、同様の状況は揖保川流域の福田片岡遺跡でも確認されている。広い地域で自然災害が起こっており、それは複数年にわたる天候不順が原因であろう。たとえ大きな洪水が直接押し寄せなくても、実りの秋に水田が水に浸かれば生産量は激減し、それが数年続けば水田を生産基盤としていた弥生社会では壊滅的な打撃を被ろう。このような自然環境の変化が要因となったものか、或いは韓半島や中国大陸の社会情勢の変化が要因となったものか、この時期に地域間抗争が勃発したと言われている。

確かに高地性集落の中には一般的な生産活動から隔絶した立地を持ち、防御的施設の遺構をもつものや、大型の石鏃などの武器として発達した遺物が出土するような軍事的緊張を背景としている集落も存在するのであろうが、この大谷遺跡では全くそのような遺構・遺物は含まれていない。SH１のごとく焼失住居があるものの、遺物がほとんど出土しなかったのは、前平の影響もあるが、住居廃棄に伴う人為的な所作を示す可能性もあり、戦乱に直接結びつけるわけにはいかない。台石や磨石の出土から水田耕作以外の生産活動の存在が考えられるが、このように集落ごとに特化した生産活動をおこなうようになるのも、この時期の特徴として捉えることができる。

この大谷の弥生集落は、隠れ里のような立地をもち、主たる生業を水田耕作以外に求めた集落であろう。ただ、その発生の要因は汎西日本的に大きなうねりをあげた自然環境的な成いは社会的な、またはその両者が複雑に絡んだ時代の波に求めることができよう。

その後、数百年にわたってこの地に居住するものは見られなくなる。

SD６～８や流路、包含層からは奈良時代後半～平安時代の土器が出土しているが、その時期のその他の遺構については不明である。これらの溝の上流側の谷は巨石が転落しており、一部斜面には岩盤が露出する地形であった。出土した遺物には８世紀から10世紀までの時期幅があり、また、煤の付着した土師器甕も出土することから、窯などの生産址ではなく、生活址があったものであろう。柱穴のいくつかがその時期に所属して掘立柱建物を構成する可能性が高いものと思われるが、復元することはできなかった。いずれにしても扇状地上の小規模な集落である。

出土した遺物から見て日常の生活具が主体であり、特殊なものはほとんどない。転用硯と思われる須恵器も内面が摩滅しているだけで、墨痕も見られず確実なものではない。鉄製の紡錘車は珍しいものであるが、周東地方では竪穴住居からも出土する。焼塩土器の内陸部からの出土は官衙や寺院、金属生産や馬の飼育に関連した遺跡などで見られるが、１点のみの出土では積極的な評価はしがたい。金属生産

がこの時期にあったとする資料も得られなかった。以上のようにこの時期の遺跡の性格は全く不明であるが、南を横切る山陽道沿いの小犬丸中谷廃寺との関係上この遺跡の存在は意味を持つものと考えられる。

12世紀後半～13世紀前半になって再びこの地に集落が営まれるようになるが、それまでの空白の11世紀から12世紀前半はおそらくこの遺跡を含む地域が穀倉院領小犬丸保となる時期であり、応保年中には布施荘が立荘して山林畠地を横領する境相論がおこる。平家が滅亡した12世紀末の穀倉院領に復する頃から再び人々が生活の痕跡を残している。そして13世紀の後半までには溝や流路で囲まれた方形区画内に掘立柱建物が建てられ、この遺跡の最盛期を迎えるようである。

この方形区画は西側の河川に面した、概略南北26m、東西33m以上の範囲で、区画内の高所に大型の建物を配し、その前面の南半に中小の建物をもつ。大型の建物内には地鎮として古瀬戸灰釉小壷を納めており、周辺からは17世紀前半までの多くの遺物が出土している。区画外の北側には梁行きの長い建物や小規模な建物が建つ。厩や屑などの小屋があったものであろうか。13世紀から14世紀の煮炊具の多くはこの地区のSD11に廃棄されたものである。区画外の南側は更に小規模な小屋が散在しており、山側のSB1横には焼土や炭を含んだ土坑があり、小鍛冶をおこなっていたらしい。焼土は区画内の山側にも見られる。小鍛冶は鏨や楔などの道具を用いて釘などの日常の品を作っていたのであろうが、末期には鋳物鍛冶をおこなっていた可能性がある。鉄滓や鉄砲玉はその時期のものであろう。南側の西半は遺構の空白地となる。そこで唯一検出された遺構が火葬址であり、本来の墓所は別にあるのかもしれないが、葬送に関係した地区として画されている。

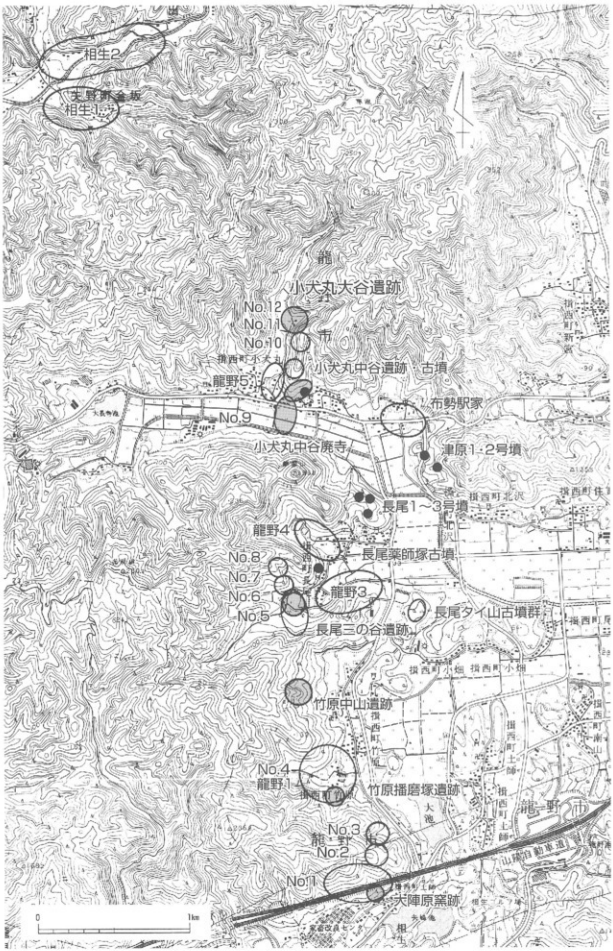
光明山城が落城したといわれる16世紀後半以降は出土遺物量が減少し、唐津の椀・皿が持ち込まれる17世紀前半までには集落は衰退し、その後、耕作地となり、石垣による段々畑が作られる。

以上、些か大胆に遺構・遺物を設定し、想像を逞しくして時代背景と遺跡を重ね合わせたため、空論を積み上げただけかも知れないが、この地域の歴史の一端を垣間見る手がかりにはなるであろう。山陽道という大動脈を控えた地とはいえ、播磨の片隅の小さな谷の中の小さな集落にも時代の波が幾度となく押し寄せる様は、この地域の他の遺跡にも同様の波が届いていることを示している。

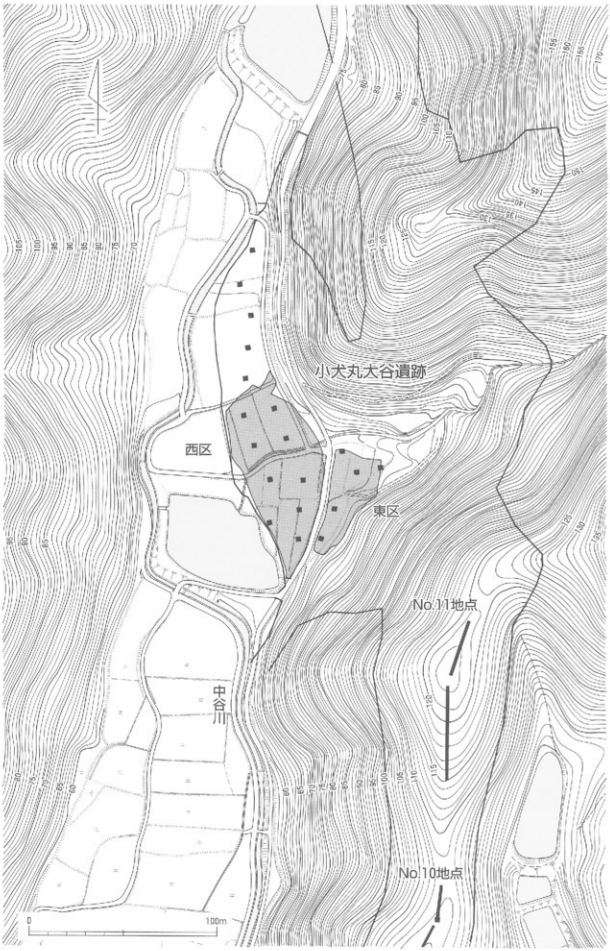
参考文献
葛野　豊 1994「産銅遺跡調査への予察報告」『兵庫鉱業史の研究Ⅰ』妙見山麓遺跡調査会
石田善人 1978「風土記の世界」『龍野市史第1巻』龍野市
石田善人 1978「中世の龍野」『龍野市史第1巻』龍野市
寄井遺跡調査団 1994『龍野市寄井遺跡』龍野市文化財調査報告13
岸本道昭 1994「断絶の中期と後期－西播磨弥生社会の理解のために－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3　設立10周年記念論集』財団法人大阪文化財協会
岸本道昭　1994「弥生集落の構造と地域史的位置」『姫久山・前地遺跡』龍野市文化財調査報告15　龍野市教育委員会

本報告書をまとめるにあたって、以下の方々の教示・助言を得た。（敬称略）
岸本道昭、野村展右　（以上、龍野市教育委員会）、
山本三郎、岡田章一、森内秀造、西口圭介、藤田　淳、松岡千寿　（以上、兵庫県教育委員会）

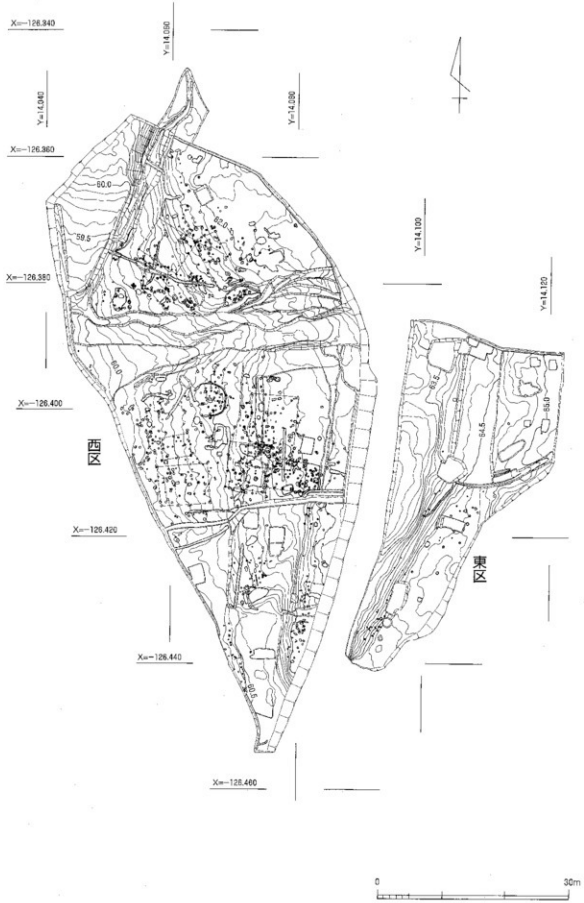
図　　版



山陽自動車道新宮インターチェンジ関連遺跡分布図



周辺の地形と調査範囲


X=-126.340
Y=14.080
Y=14.040
Y=14.000
X=-126.360
X=-126.380
X=-126.400
X=-126.420
X=-126.440
X=-126.460
Y=14.120
Y=14.160
西区
東区
0
30m

調査地区

図版4

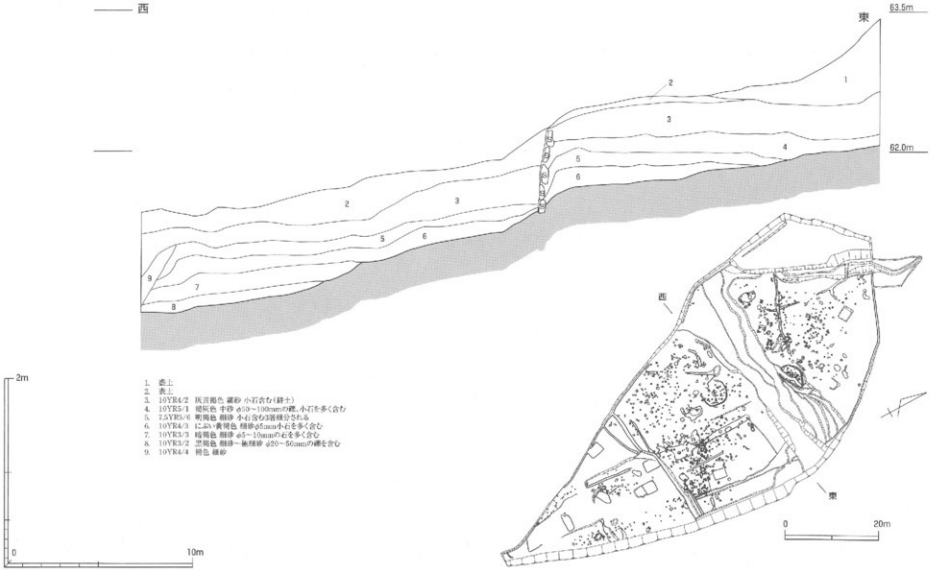
SD11
旧河道
SB9
SB8
SB7
P61
SH2
SD7
SD6
SD8
流路3
流路1
西区
SH1
SD5
SK9
SB6
SB3
SD4
SB4
SB5
SB2
SD3
火舞址2
火舞址1
東区
SK1
SD2
SK2
P7
SK4
SB1
SD1
SK3
落ち込み
0
20m

遺構配置図

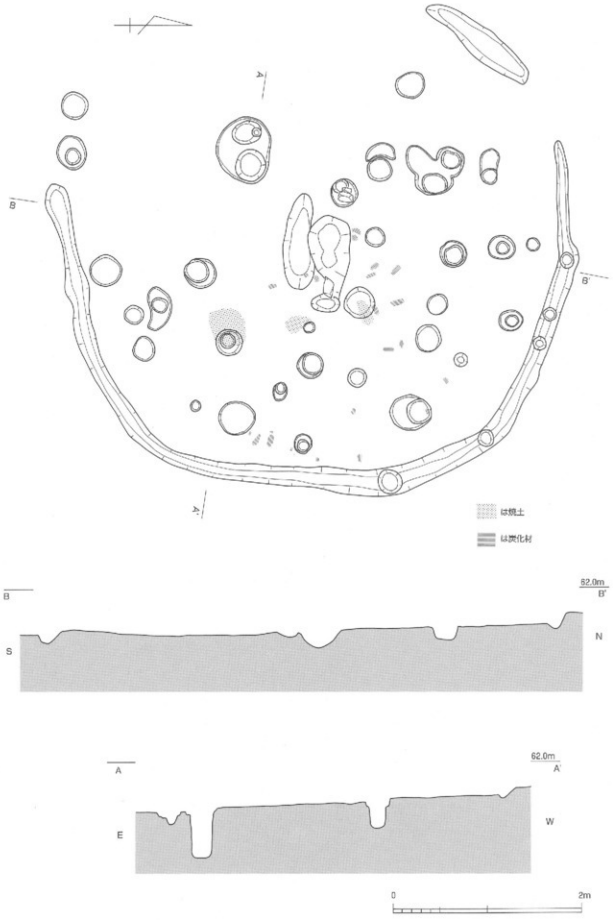
SB9
SD11
P66
SB7
P85
SD10
P83
SD9
SB8
SH2
SD6
SD8
P76
P74
SD7
流路3
流路1
SD4
SD5
SH1
SB3
P46
P60
SB6
SK9
P43
SK7
P31
P27
P32
P26
P55
SB5
P28
P23
P8
P30
P9
P17
P34
P29
P22
P12
SB4
SB2
P13
P20
P15
P14
P19
SD3
P6
0
5m
火葬址2
火葬址1

西区遺構配置図（詳細）

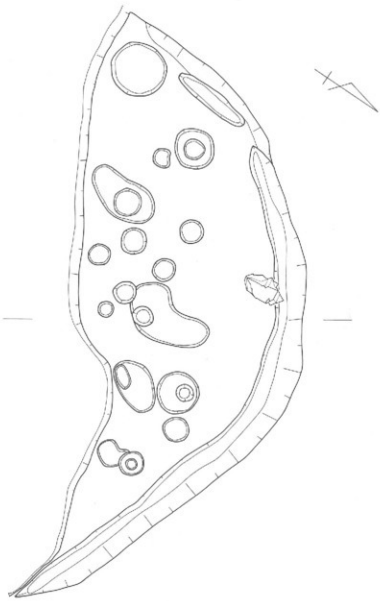
基本土層図

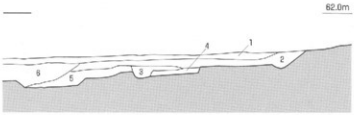


1. 表土
2. 表土
3. 10YR4/2 灰黄褐色 細砂 小石含む(耕土)
4. 10YR5/1 褐灰色 中砂 φ50～100mmの礫、小石を多く含む
5. 7.5YR5/6 明褐色 細砂 小石含む3層種分含れる
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂φ5mm小石を多く含む
7. 10YR3/3 暗褐色 細砂 φ5～10mmの石を多く含む
8. 10YR3/2 黒褐色 細砂～極細砂 φ20～50mmの礫を含む
9. 10YR4/4 褐色 細砂



竪穴住居　SH1

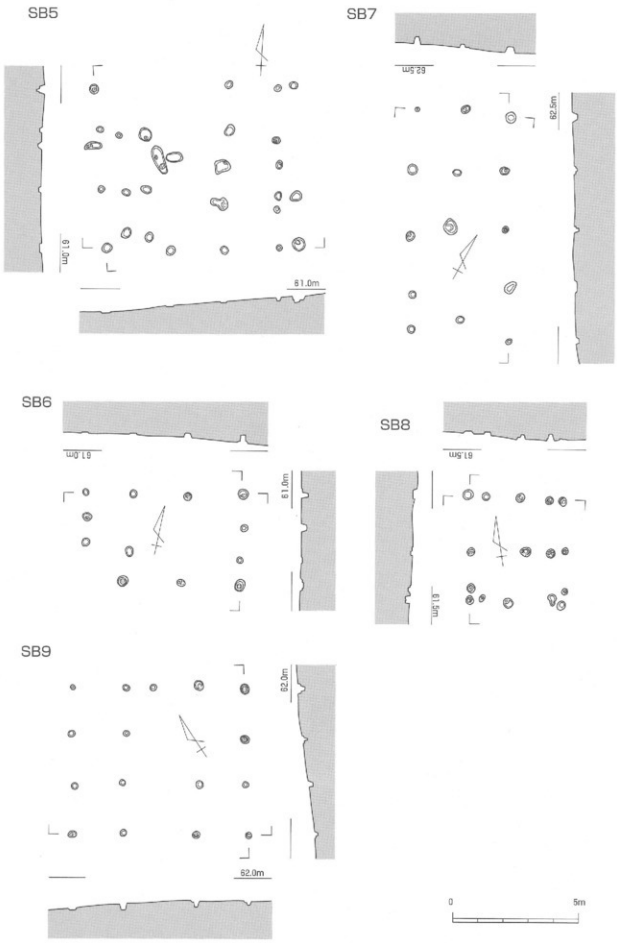




1. 10YR5/2 灰黄褐色 細砂 小環含む
2. 10YR3/2 黒褐色 礫砂
3. 10YR3/1 黒褐色 礫砂
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂
5. 10YR3/3 暗褐色 礫砂
6. 10YR3/1 黒褐色 礫砂

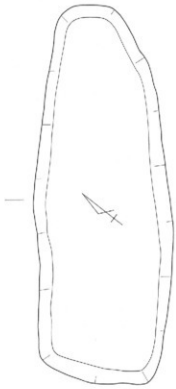
竪穴住居　SH2

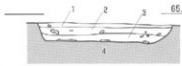
掘立柱建物　SB1・2・3・4



掘立柱建物　SB5・6・7・8・9

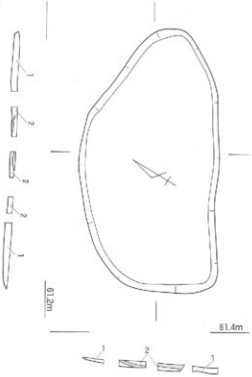
SK1





1. 10YR4/2 灰黄褐色 細砂 炭を含む
2. 10YR3/3 暗褐色 細砂 炭、小石を含む
3. 10YR4/1 褐色 細砂 炭を含む
4. 10YR5/6 黄褐色 細砂 炭を含む

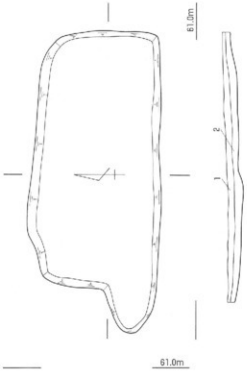
SK2

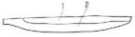


撹乱

1. 10YR5/2 灰黄褐色 細砂
2. 10YR2/3 暗褐色 細砂

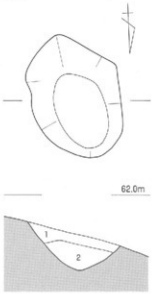
SK3





1. 10YR4/1 褐灰色 細砂 小石含む
2. 10YR4/4 褐色 細砂

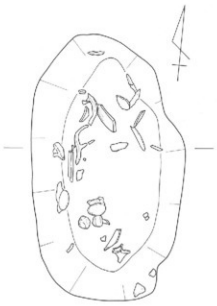
SK4

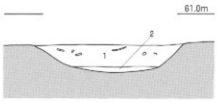


1. 10YR4/1 褐灰色 細砂 小丸礫を多く含む
2. 10YR4/4 褐色 細砂 小丸礫、明褐色土を含む

土坑　SK1・2・3・4

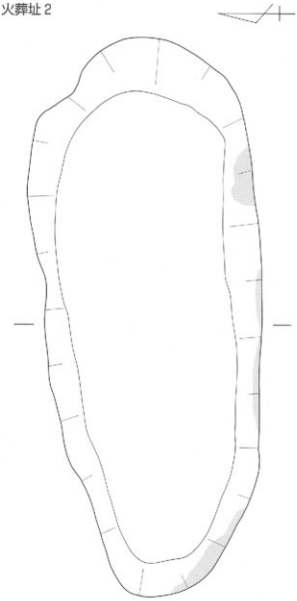
火葬址1



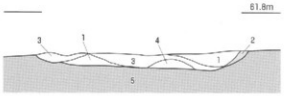


1. 灰・骨片
2. 7.5YR5/4 にぶい褐色 礫砂

火葬址2



は焼土

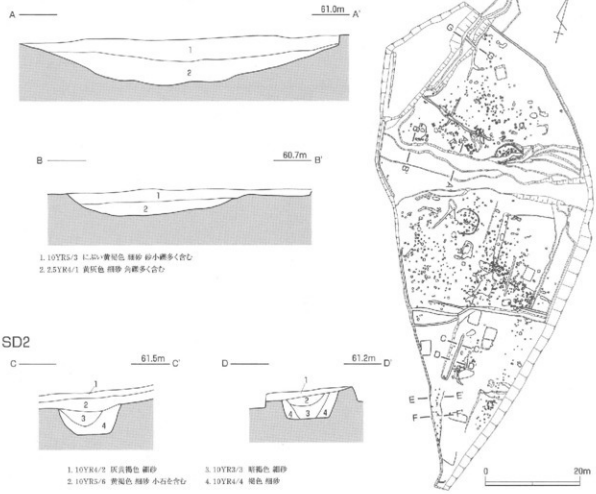


1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 地山砂 小石含む
2. 5YR4/6 赤褐色 礫砂
3. 2.5YR4/1 黄灰色 焼砂 炭含む
4. 7.5YR5/4 にぶい褐色 礫砂
5. 10YR5/6 黄褐色 焼砂 地山

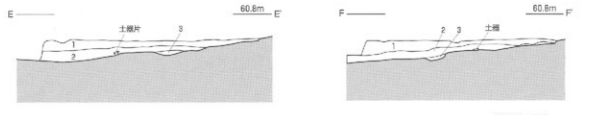
0 50cm

火葬址 1・2

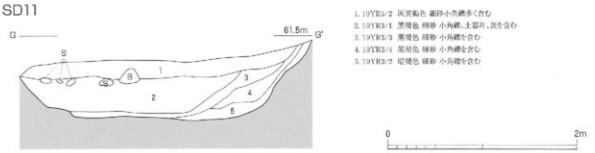
流路3



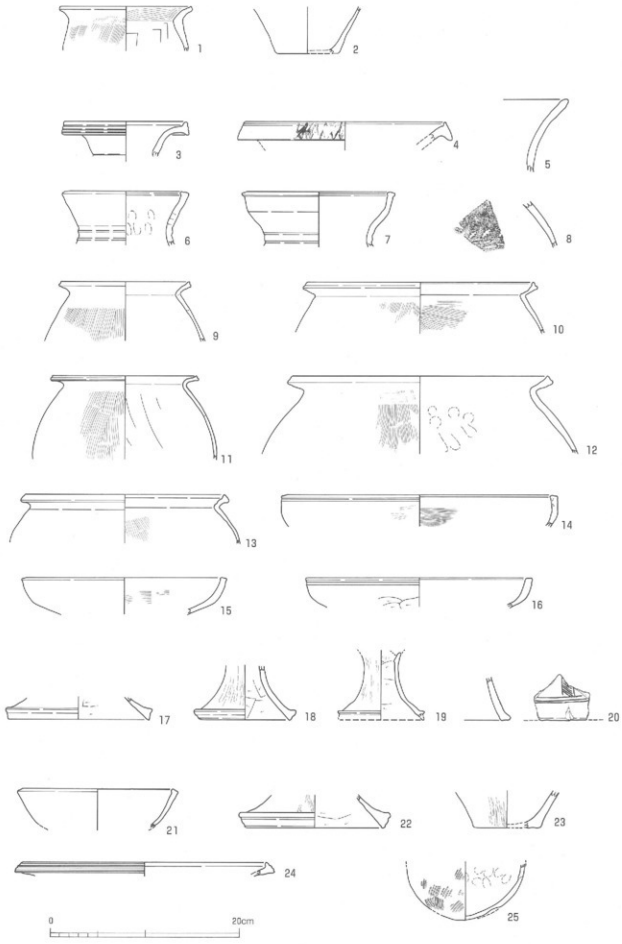
落ち込み



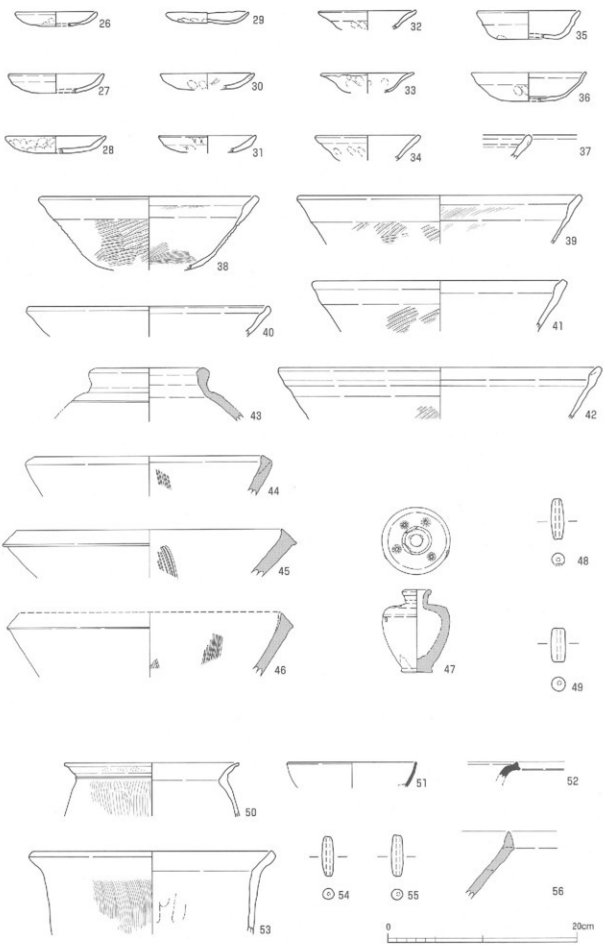
SD11



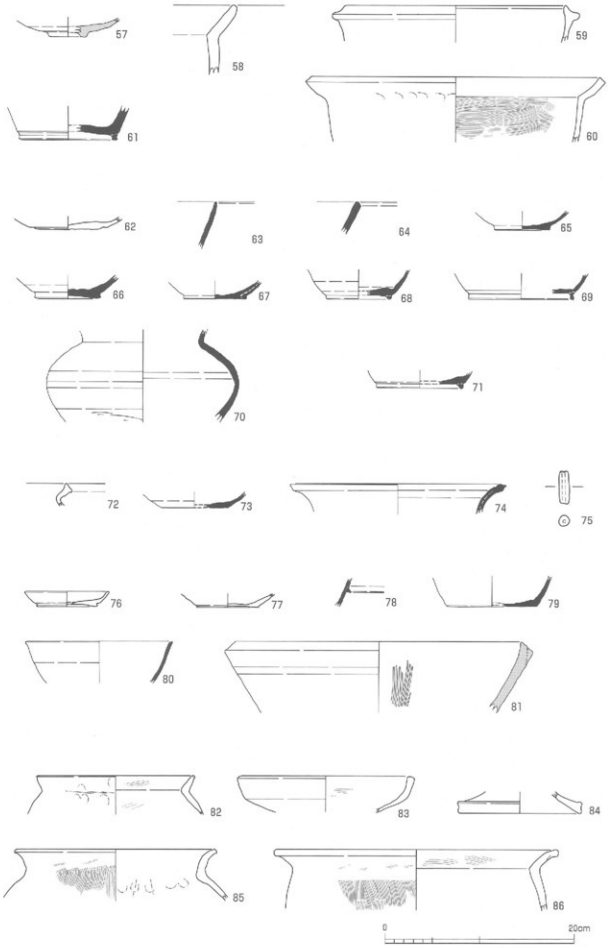
溝等土層図　流路３、SD2、落ち込み、SD11



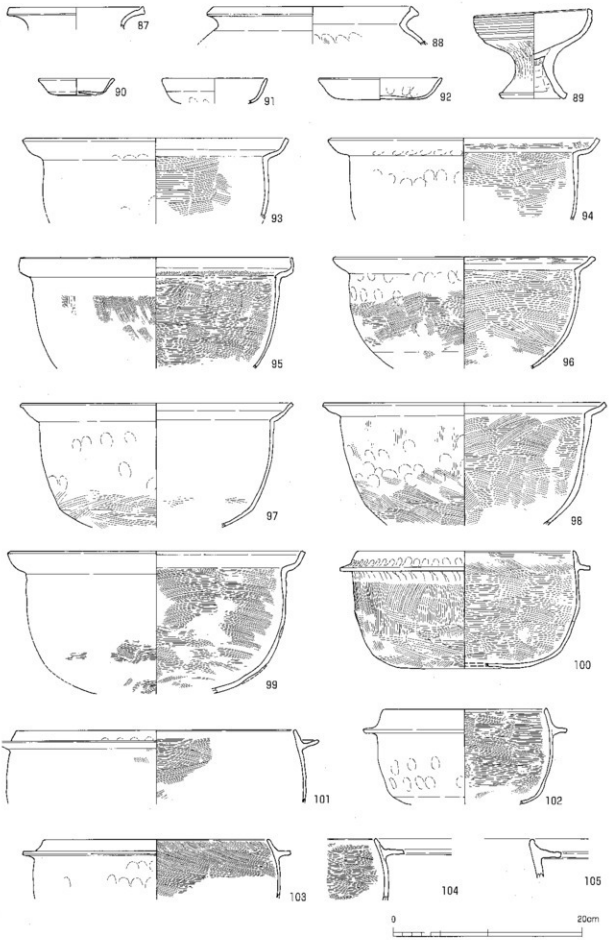
遺物　土器1　竪穴住居、柱穴出土土器



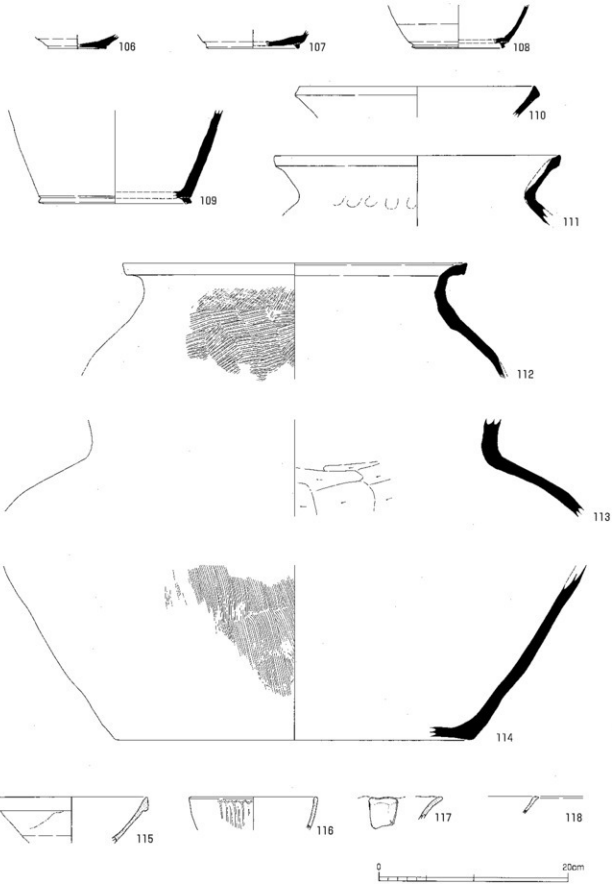
遺物　土器2　柱穴、落ち込み、土坑出土土器



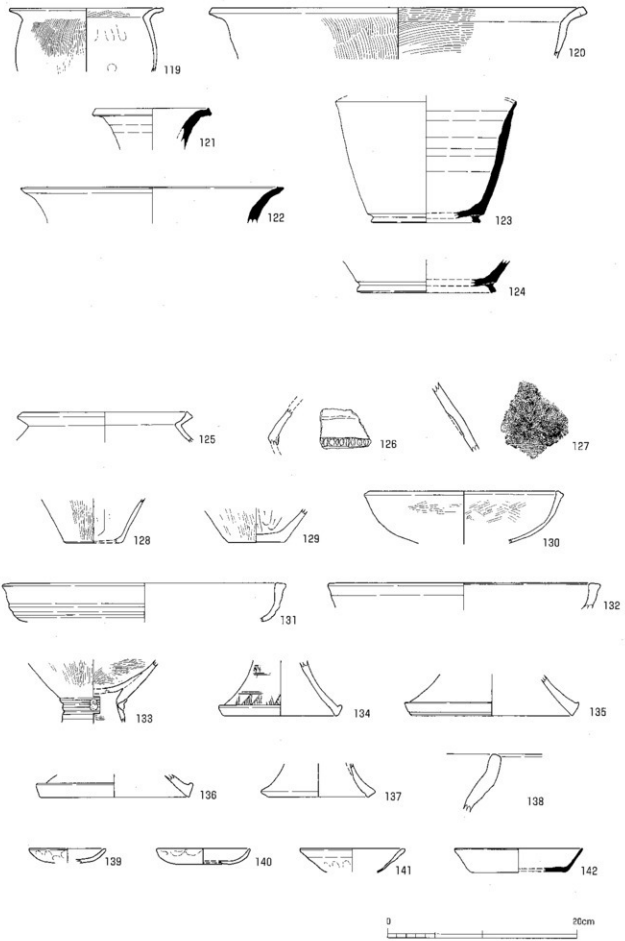
遺物　土器3　溝、流路出土土器



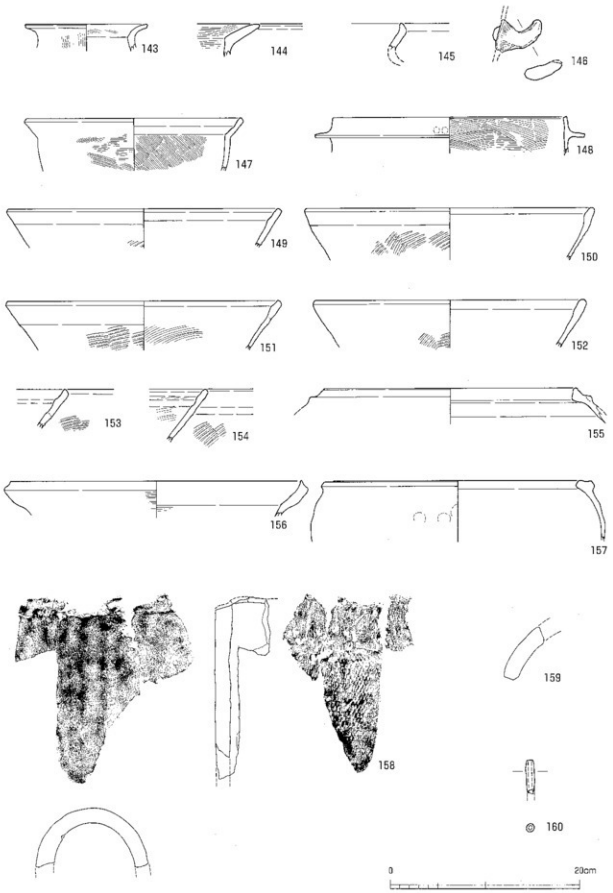
遺物　土器4　流路2出土土器



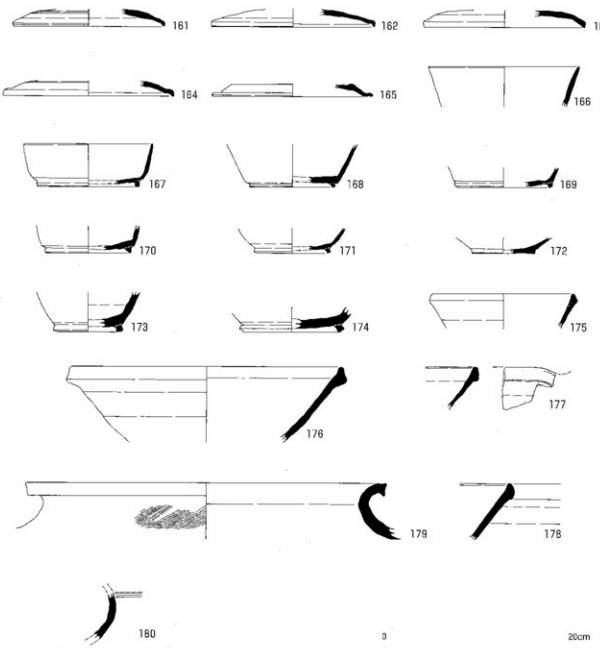
遺物　土器5　流路2出土土器



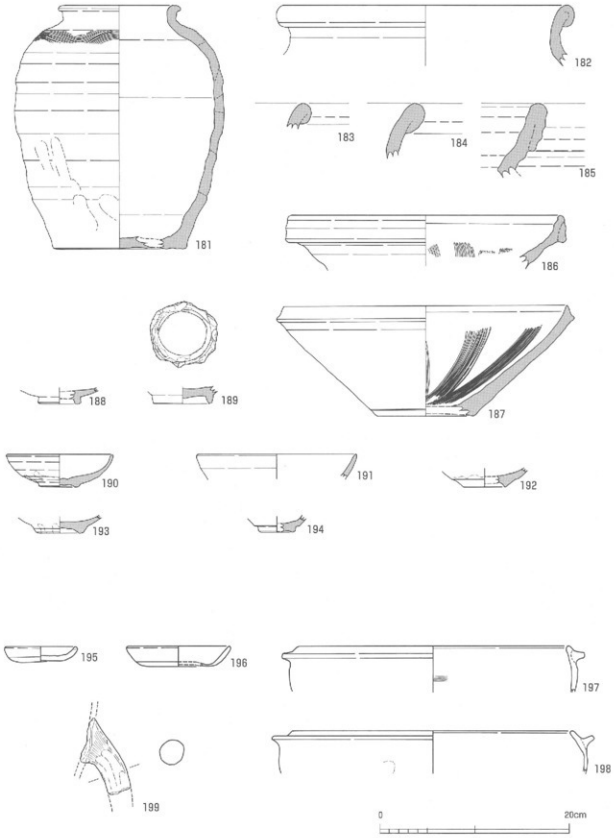
遺物　土器6　旧河道、西区包含層出土土器



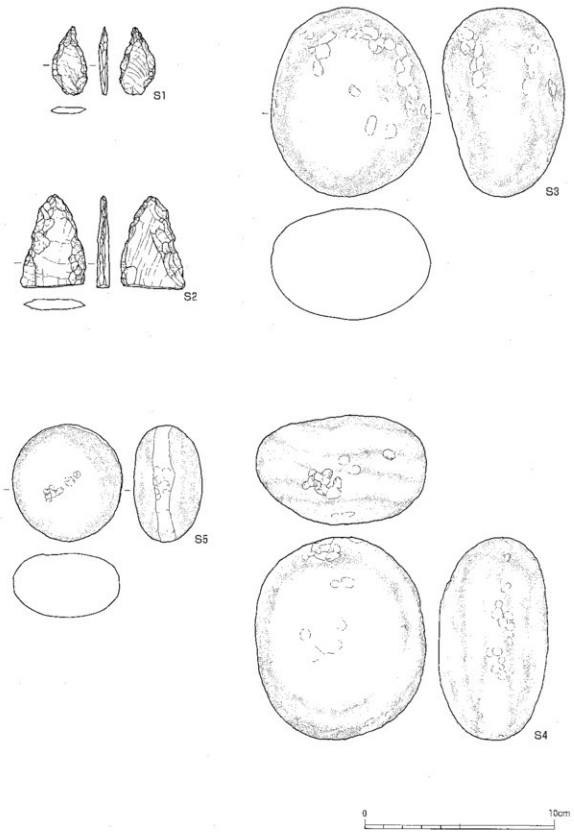
遺物　土器 7　西区包含層出土土器



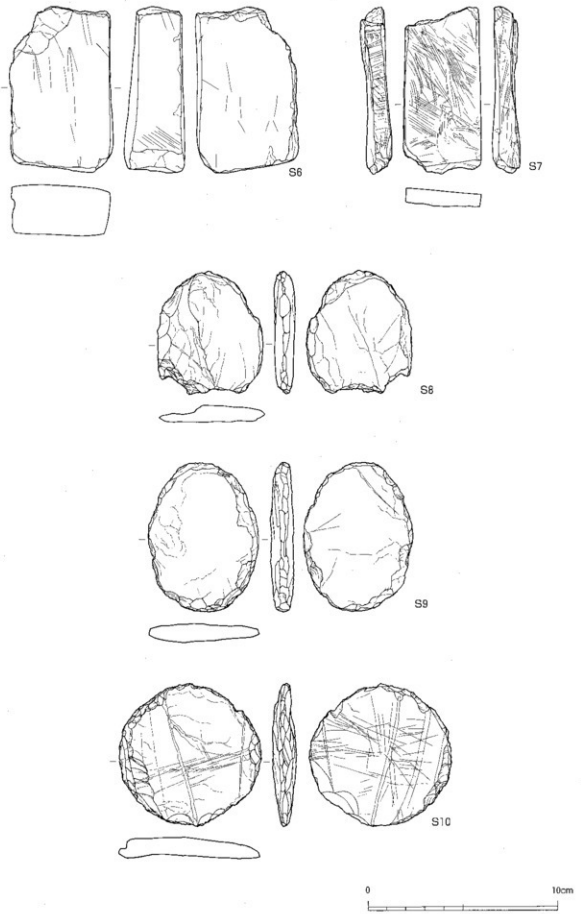
遺物　土器８　西区包含層出土土器



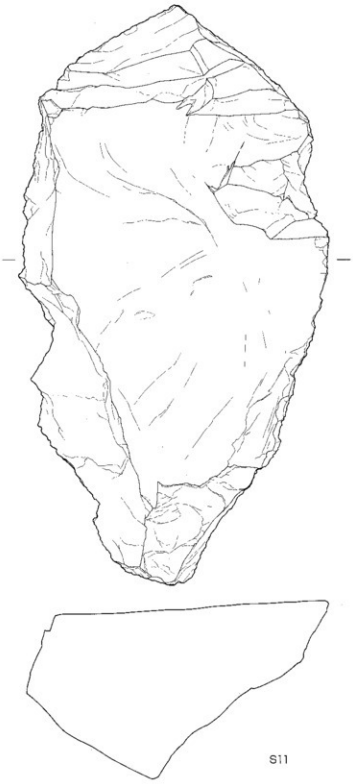
遺物　土器9　西区・東区包含層出土土器



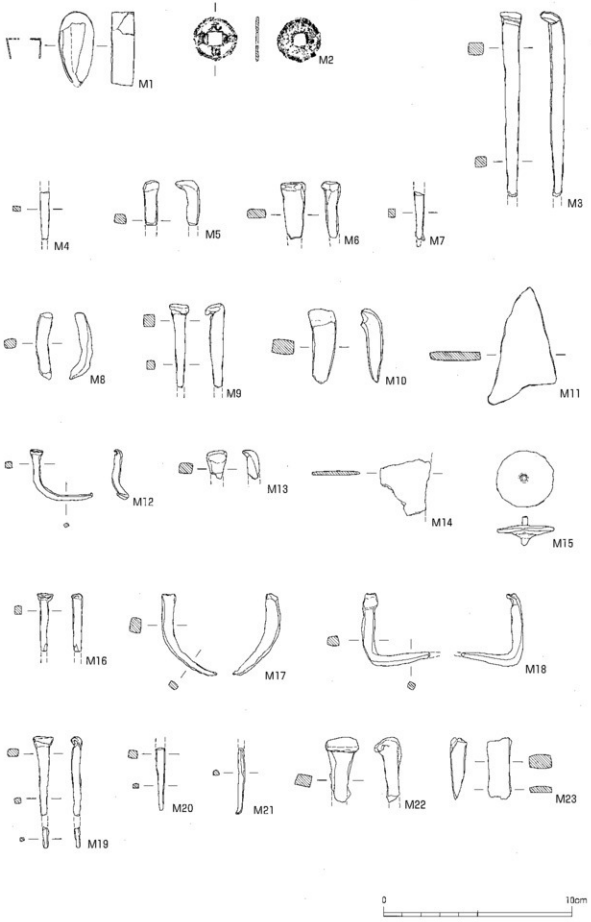
遺物　石器 1



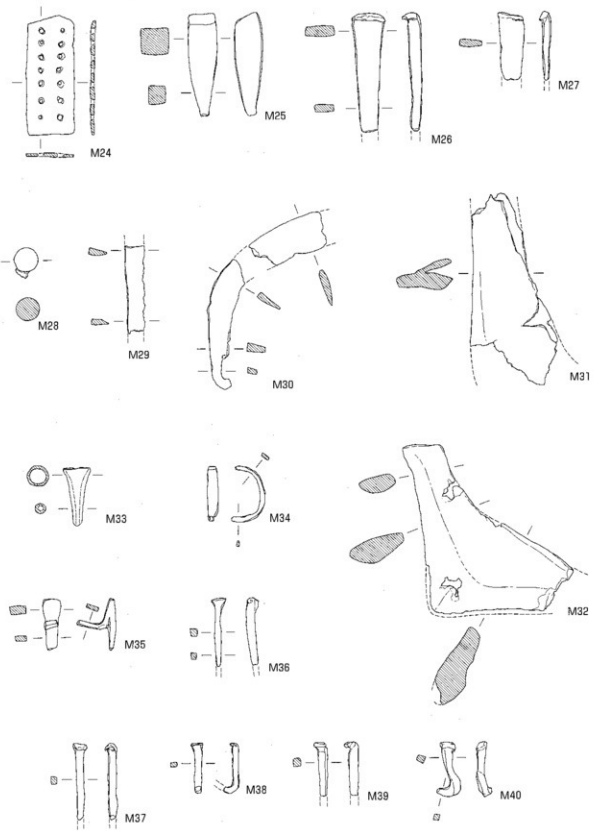
遺物　石器2



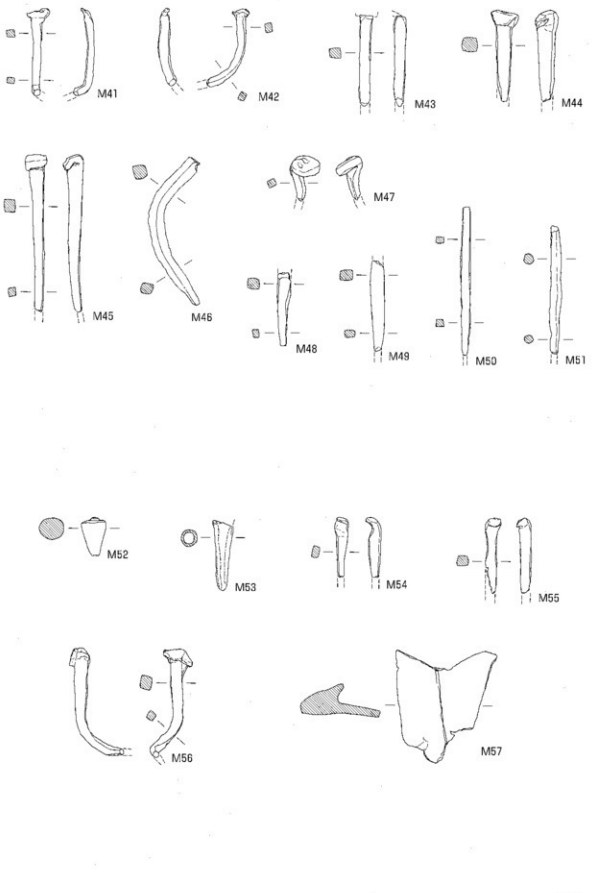
遺物　石器3



遺物　金属器１　銅製品、遺構出土鉄器



遺物　金属器２　西区包含層出土鉄器

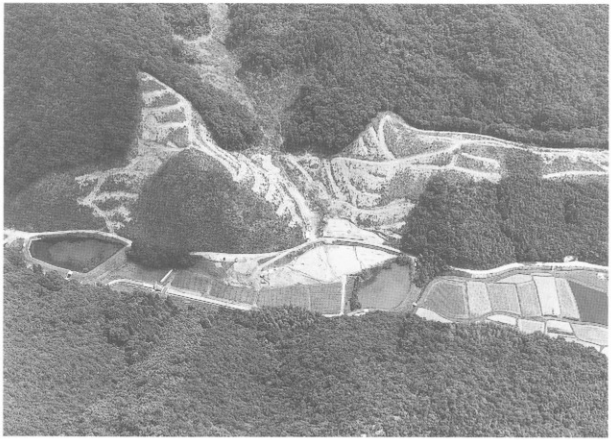


遺物　金属器３　西区・東区包含層出土鉄器

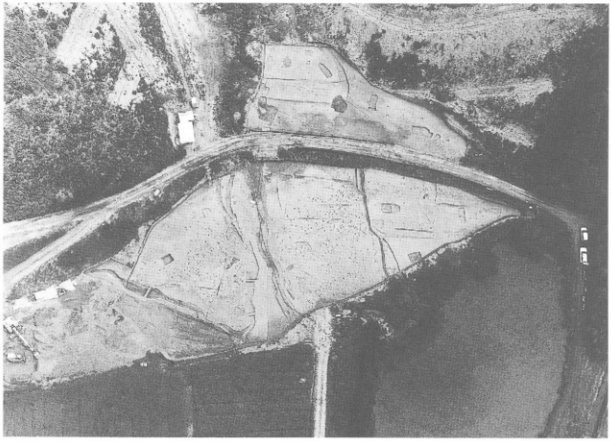
写真図版

遠景（南から）

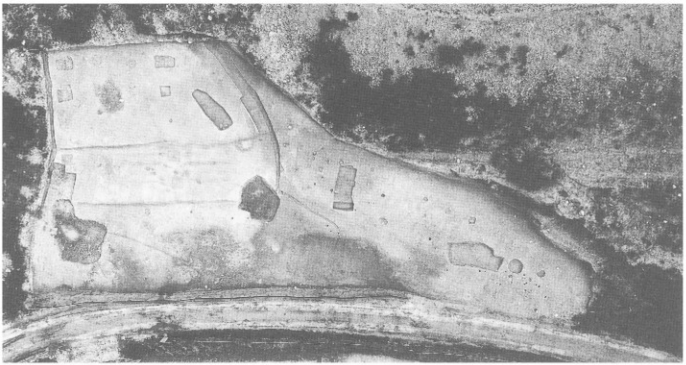
遠景（北西から）



遠景（西から）



遠景　（調査区）



東区全景（左が北）

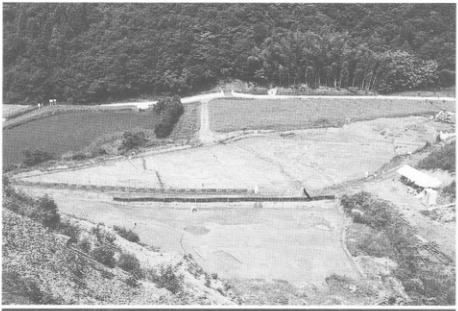
遠景（南から）

近景（南から）

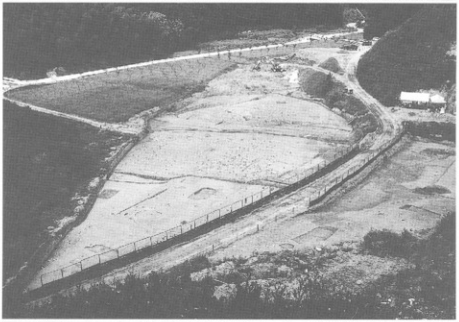
近景（西から）

谷の出口をのぞむ（北から）

西区全景（上が北）



全景（東から）

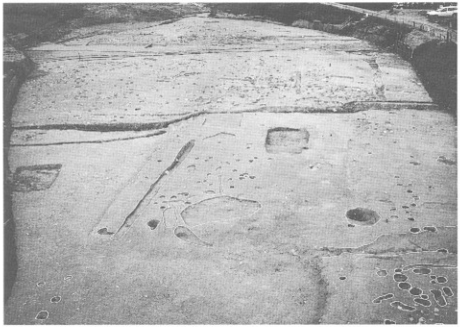


西区（南から）

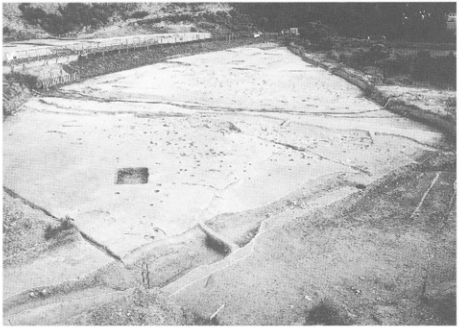
東区（南から）

西区（北から）

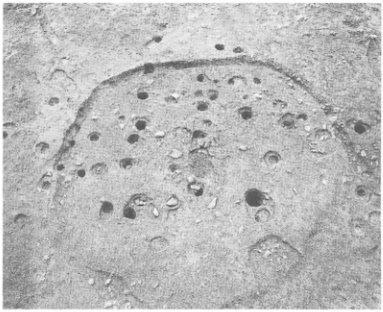
西区北半



西区南半



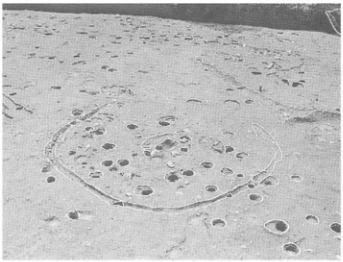
西区（北から）



SH1（西から）

SH1　検出状況（西から）

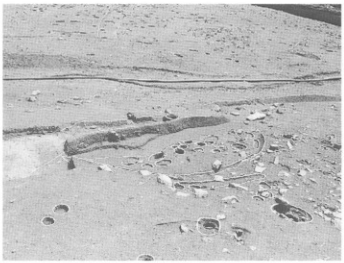
SH1　中央土坑（東から）



SH1（東から）

SH1と周辺（西から）

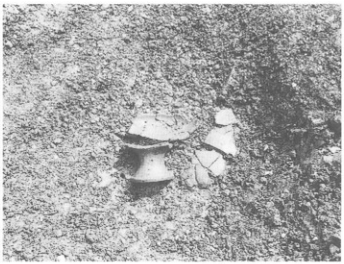
SH2（南から）



SH2（北から）

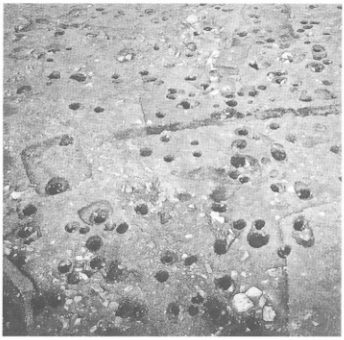
SH1 と SH2（西から）

SH2 台石出土状況



弥生土器状況（SD11）

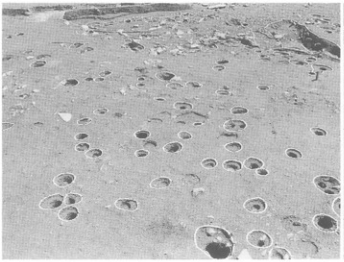
SB1（北から）



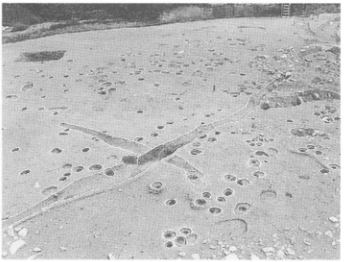
SB2（東から）

SB3・4（北から）

SB5・6（西から）



SB7（北から）

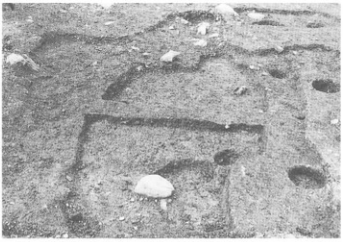


SB8・9（西から）

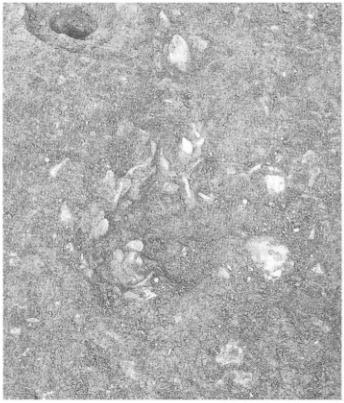
SK3（南西から）

SK2（北東から）

SK7（東から）

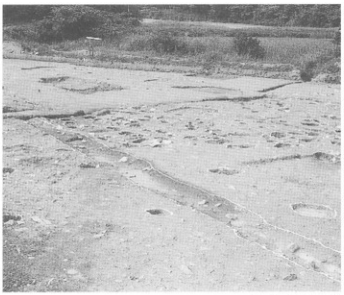


SK9（北から）



火葬址1（南から）

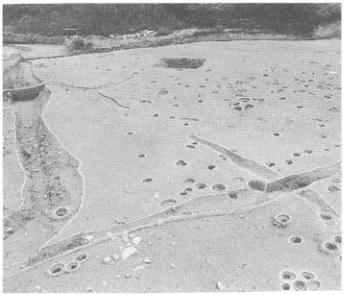
火葬址2（西から）



SD4（北から）

SD5（南から）

SD6・7・8、流路3（東から）

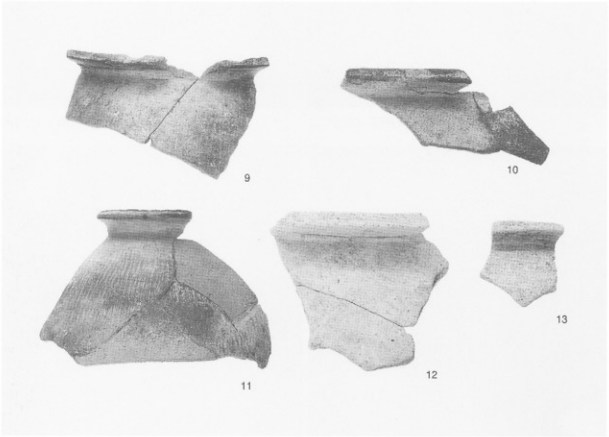


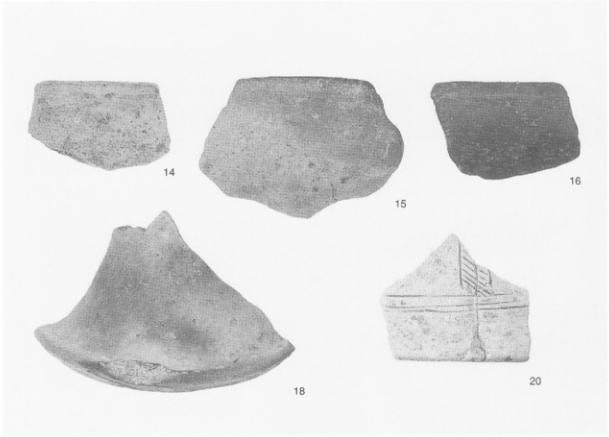
SD9・10・11（南から）

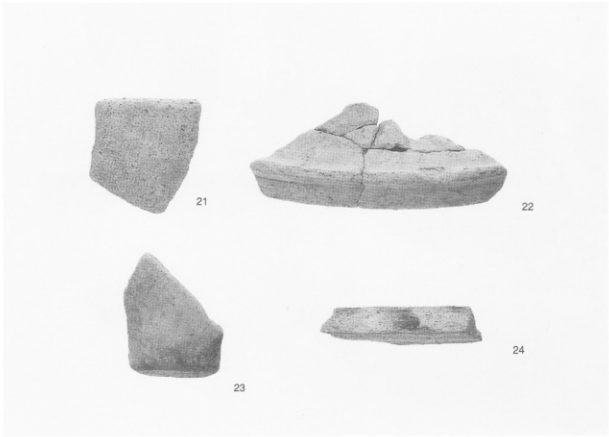
SD11と旧河道（南から）

SD11土器出土状況

3
4
7
6


9
10
11
12
13


14
15
16
18
20

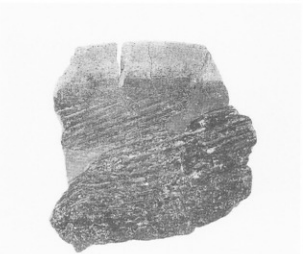

21
22
23
24

1

28

29

30


38

39

25

35

36

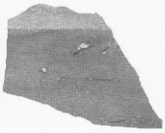
41

42

43

44

45


46

47

50

53

60

48

49

54

55

75

160

61

66

68

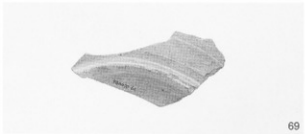
73

78

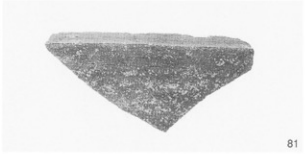
82

65

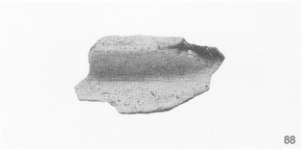
67


69

76


81

86


88

89

93

90

94

92

96

95

97

98

99

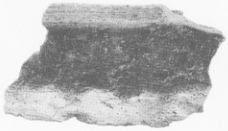
100

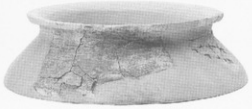
101

102

103

104


111


112

115

116

118

119

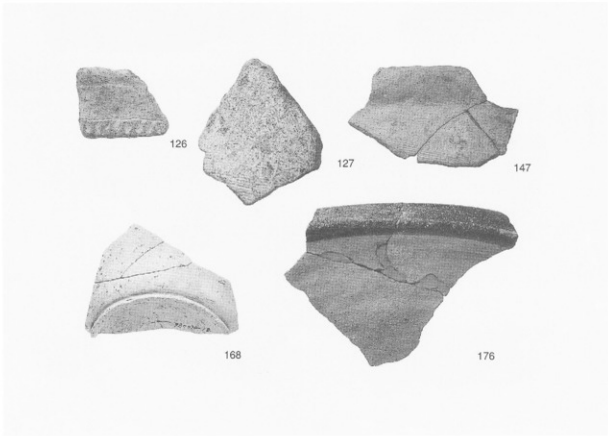
120

128

123

130

131


126
127
147
168
176

133

134

137

138

146

148

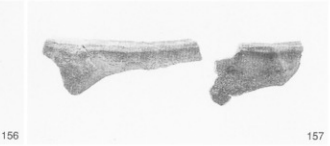
149

150

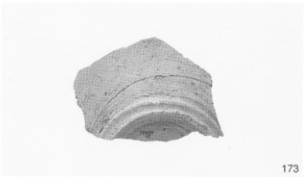
151

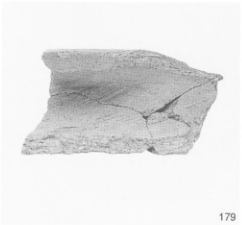
152

156


157

167

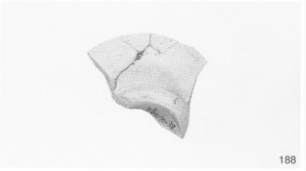

173

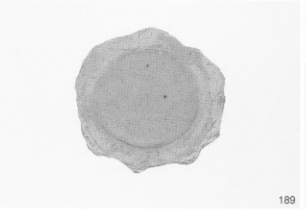

179

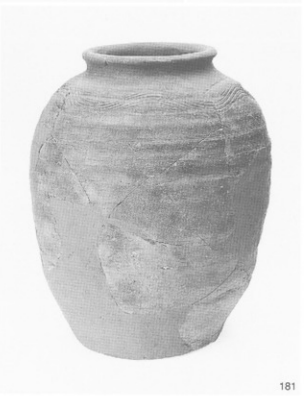
182

184

187

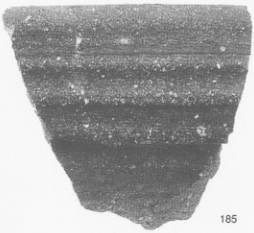

188

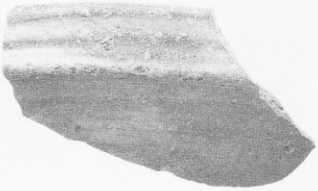

189


181

190

183


185


186

191

193

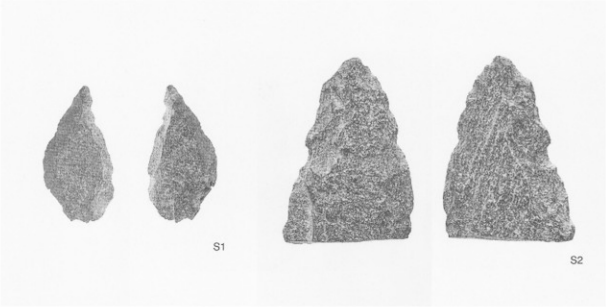
194

195

197

198

199



S1

S2

S3

S5

S4

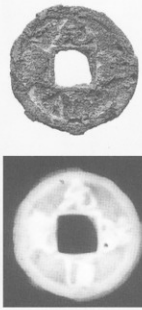
S6

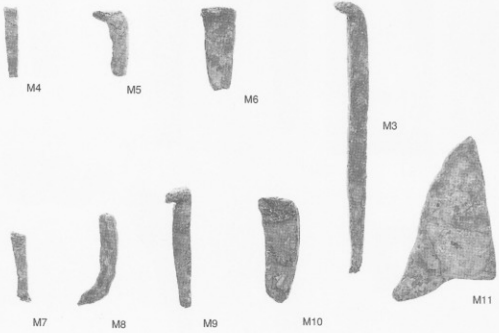
S7

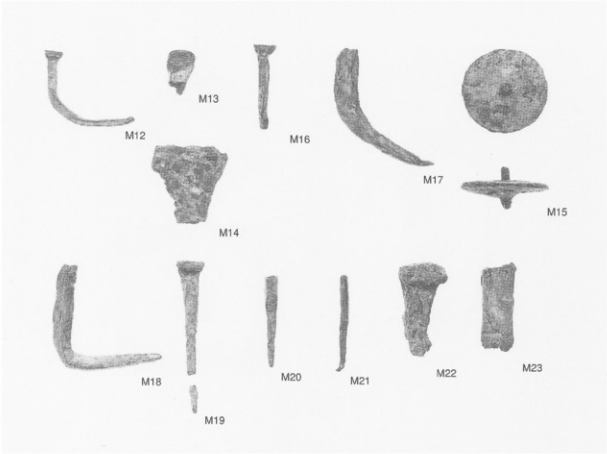
S9

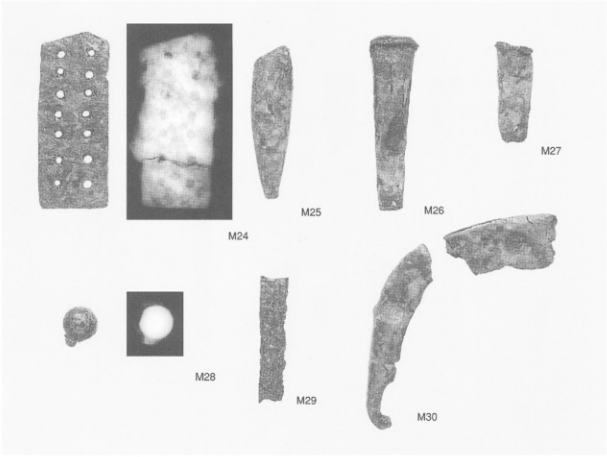
S11

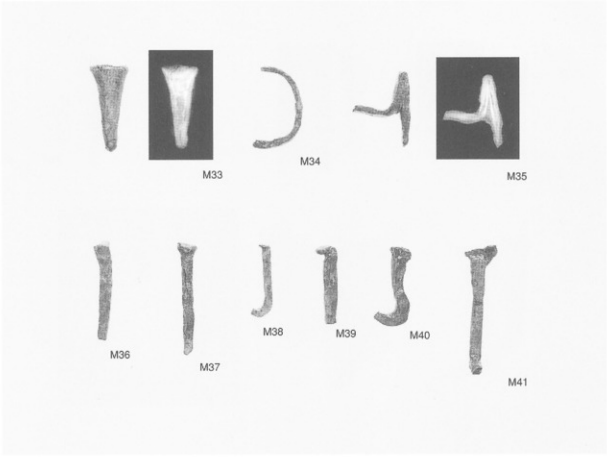
M1

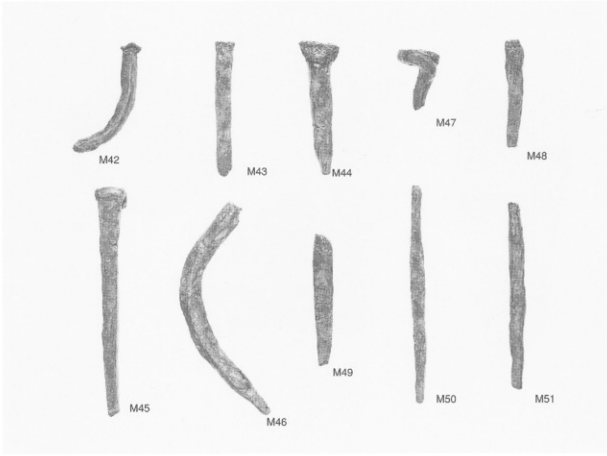

M2

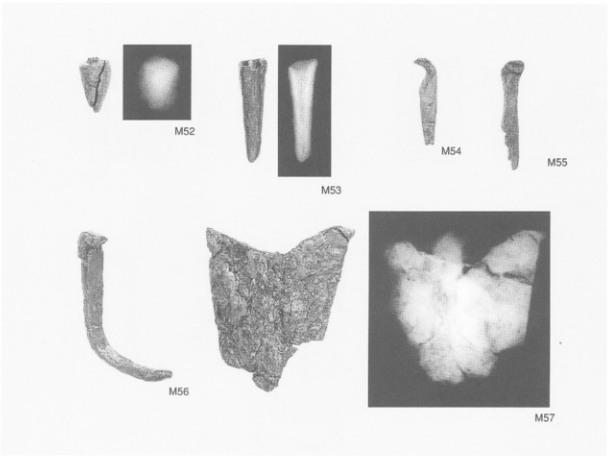

M4
M5
M6
M3
M11
M7
M8
M9
M10

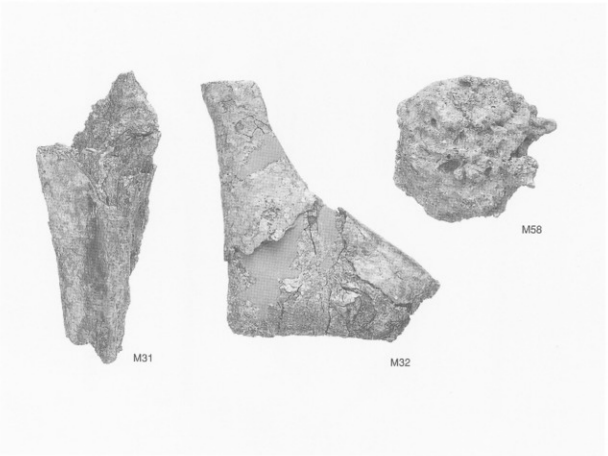

M12
M13
M16
M17
M15
M14
M18
M19
M20
M21
M22
M23


M24
M25
M26
M27
M28
M29
M30


M33
M34
M35
M36
M37
M38
M39
M40
M41


M42
M43
M44
M47
M48
M45
M46
M49
M50
M51


M52
M53
M54
M55
M56
M57


M31
M32
M58

報 告 書 抄 録

ふりがな	こいぬまるおおたにいせき
書名	小犬丸大谷遺跡
副書名	山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	1
シリーズ番号	兵庫県文化財調査報告第265冊
編著者名	別府洋二
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号 TEL 078-531-7011
発行年月日	西暦2004（平成16）年３月19日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小犬丸大谷遺跡（こいぬまるおおたにいせき）	兵庫県龍野市小犬丸字大谷（ひょうごけんたつのし こいぬまるあざおおたに）	28211	980070	14度8分	126度42分	1995.07.13～1995.08.30	3,756m²	山陽自動車道新宮I.C.建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小犬丸大谷遺跡	集落	弥生・奈良・平安 鎌倉・室町時代	竪穴住居 掘立柱建物 火葬址 旧河道 溝 土坑	弥生土器 須恵器 土師器 瀬戸 備前・亀山 石器	狭小な谷間の集落

兵庫県文化財調査報告　第265冊

小犬丸大谷遺跡

山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告1

2004年3月19日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1－5

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10－1

印　刷　ウニスガ印刷株式会社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39